

女山長谷古墳群

村山健治

目次

○女山古墳群について	2
○女山を中心とした古墳群の位置	5
○女山古墳群の位置図	6
○古墳出品表	7
○古墳発掘の状況	8
○第十三号古墳	12
○第二十号古墳	15
○第三十号古墳	19
○第三十二号古墳	21
○第三十二号出土品	23
○第十二号出土品	28
○第八号出土品	34
○長谷出土品	38
○古塚山出土品	39
○女山産女谷出土の銅銚	41
○後記	43

女山古墳群について

謎の遺跡として残る、女山の神籠石の内部に多数の石窟や、洞穴があると云う事は、私の子供の頃から、此の地方の人達には知られていた。

母の実家であった女山の梅野家に遊びに行つては、祖父から、おとぎ話の様に、神籠石という列石は、鬼が一晩の内に大きな石をかついで持つて来て築いたものだが、鶏が夜明けの時をつげたので、一まわり築いてしまわぬうちに投げ出して帰つてしまったとか、山の中には、鬼の岩屋と云う石窟があるのだとか言ひかされていた。

それでもこれはお話しであつて、本当は女王が住んでいたところらしく此の部落を女王山と呼んでいたが、王と呼ぶと、皇室に対して不敬になるので女山と呼ぶ様になつたのだと話してくれていた。

中学生になつた私は、尸史の先生から、方々の古墳の話をきかされ、日頃遊びに行つた女山の山を思い出して、さては此所にも私達の祖先の尸史の手がかりになるものが何かありそうだと、暇を見ては山を歩きまわり、鬼の岩屋と云われる石窟は、其の頃、昼でも暗い杉林の中の山の崖に、しだにおおわれ、さみに口を開けていた。

中に入つて見ても何のために作つたのか、さっぱり解らず、不可思議のまま帰つて来るのだった。又土器のかけらや、曲玉などを発見した事もあつた。

三十年ばかり前、日子神社の境内をなめる時、偶然人骨が発見されたが、古墳とは知らずどうしてこんな所に人が埋められてあつたのだろうと、村人は不思議に思つたらしい。へ今考えると之が一号二号古墳である。

其の後、山を開墾したり、崖が崩れたりした跡などから、曲玉や耳輪などが拾ひ出され、また終戦後

には女山の南の山の産女谷より杉本修氏の手で銅鉾が発掘されている。此の地点より三つの山をこえ北の山の頂上には、高さ十一米、巾四米の大岩がそびえているし、谷々には四つの吸門があり、

此の謎につゝ、まれた神籠石の内部より珍しい品々が拾い出されるにしたがつて、最近神域か、城塞か、住居か、古墳かと、心ある人々に依つて、色々と調査されたらしいが、決定的な事は解らぬまま今日に到っている。

それが昭和三十二年、梅野茂芳氏所有の山を未墾地買収で開墾すると云う噂がたち始めたので、同氏が其の土地を開墾し、密柑を植える事にした。三十三年二月より開墾に取りかゝったところ、次々と十ヶ所ほどの古墳を発見して、人骨や副葬品など多数出土したので、今まで住居跡か古墳かはっきりしなかつた石窟が古墳であつたと云う事がわかつたわけである。

梅野氏は、あまりにも多数の人骨が出土したので古墳の碑をたて、手あつく葬つたのであるが、其の話を聞いた三養基郡田代の松田氏は東大の近藤博士に伝え、同年十月には、近藤博士がわざ／＼こられ、出土の人骨を見られ其の時私も呼ばれて、梅野氏の宅にお伺いし、開墾当時の出土状態を、図面写真を参考にお話申上げたのであつたが、先生は、此れは人類学上貴重な資料だと言われ、後に調査する事を約束されて帰京されたのであつた。それが今度の調査となつたのである。

女山長谷古墳群の発掘調査

場 所 瀬高町大字大草字椎拾谷(長谷)

土地所有者 梅野 茂 芳

発掘年月日 昭和三十四年八月二十日より八月三十日迄

調査の目的 古代人の人骨の調査

調査の責任者 東京帝国大学人類学教室

鈴木 尚 博士

現地の調査責任者 同 所

近藤 藤四郎 博士

宿 泊 所 筑後市船小屋 玉振館

協力者人名 梅野 茂 芳 松田 観造 梅野 史則

堤 田 七太郎 村山 憲正 杉本 次人

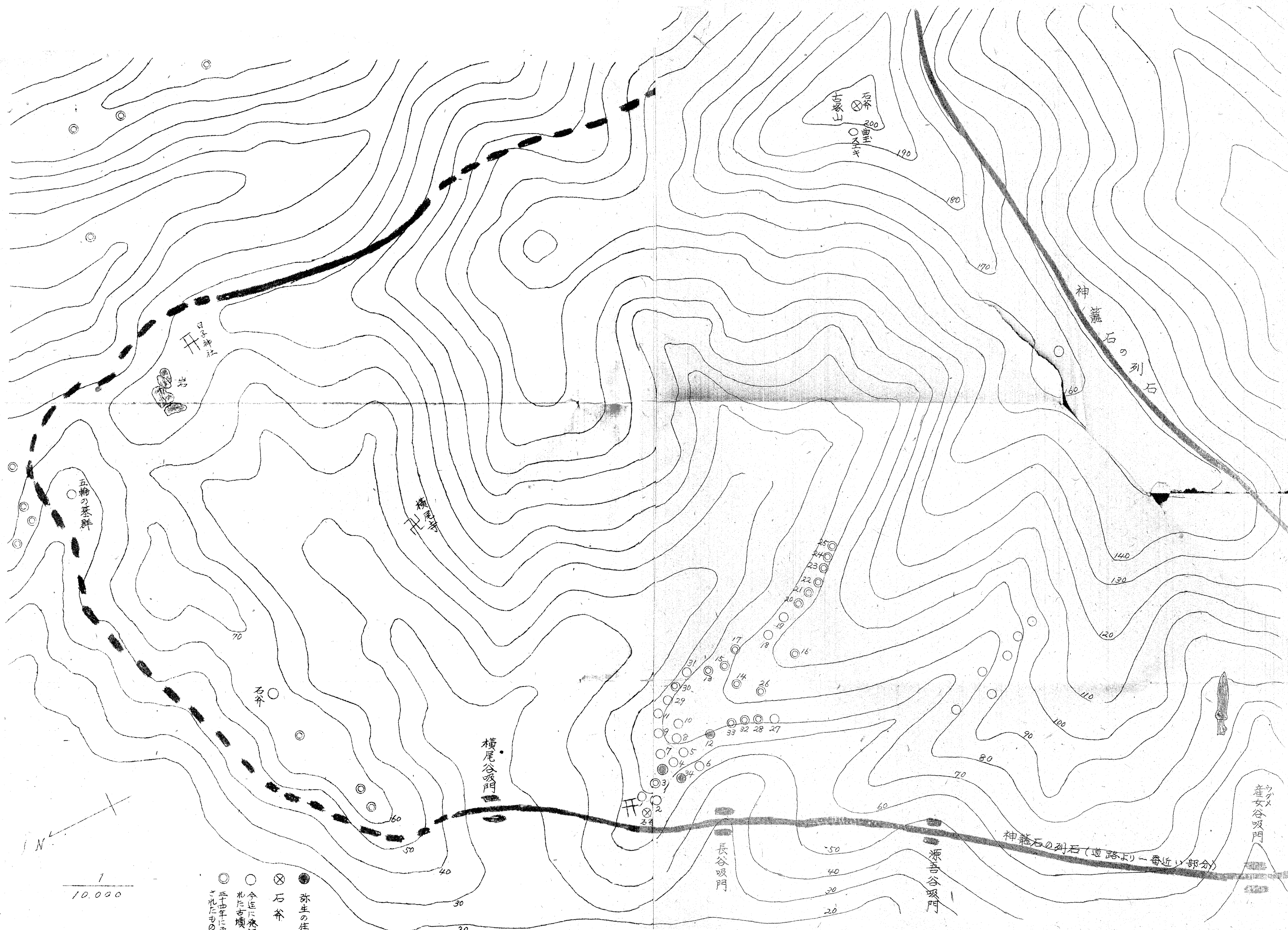
坂田 七太郎 村山 憲正 佐藤 光男

南 某 森 角男 村山 健治

篠崎 重雄(特に印刷発行につき協力を願った)

女山古墳群及神籠石を中心の図面

古墳一覧表



● 弥生の住居跡
 ○ 石斧
 ○ 今迄に発掘され
 手抄本に於て
 記されたもの

古墳出品表

△ 今迄に発掘されたもの
○ 今回調査せしもの

号数	区分	構造		人 骨	副 葬 品
1	△	土 塚	朱	人骨	
2	△	"	朱	人骨数体	
3	○	"	朱	人骨頭蓋骨	
4	⊕	石積石カ7		未発掘	未 発 掘
5	△	横穴石室	朱	人骨5体	刀子、矢じり、つか金
6	△	"	不明		
7	△	石積石カ7	朱		
8	△	"	朱	人骨2体	直刀、犬小、馬具、耳環、管玉(水晶)
9	△	"	朱		
10	△	"	朱		
11	△	横穴石室	不明		
12	○	"	朱	人骨8体	矢じり、刀子、耳環、銅4ヶ、管玉10ヶ、曲玉1、水晶
13	○	"	朱	人骨	貝くしろ、ぼうすい車1ヶ、耳環銀1ヶ、管玉4ヶ
14	○	竖穴舟形	朱	人骨	ナシ
15	○	横穴石室	ナシ		馬具(口金)、セドウより出土
16	○	竖穴石室	朱	人骨3体	30才位の男女、一体は不明
17	○	横穴石室	ナシ		
18	△	"	"		
19	△	"	"		
20	○	"	"	人骨3体 (7才位 30才位 男女)	貝くしろ2ヶ、須恵2ヶ、短刀2ヶ、刀子1、耳輪2ヶ、銀張矢じり、鉄輪
21	○	"	"		須恵器の破片、短刀、あぶみ、耳輪、銅
22	○	"	"		
23	○	"	"		

号数	区分	構 造		人 骨	副 葬 品
24	○	横穴石室	ナシ		須恵器 2ヶ、ふた石の横
25	○	"	"		
26	○	"	"	土砂くづれのため調査不能	
27	△	"	"		
28	○	"	"		
29	△	"	"		
30	○	"	"	人骨	
31	△	"	"		
32		"	"	人骨 8体	須恵器 3ヶ 曲玉 2ヶ カラス玉 30ヶ 管玉 15ヶ 耳輪金 銀銅 鈴 1ヶ 鉄器 やしり 数ヶ 刀子
33		"	"		須恵器 5ヶ
34		"	"		

古墳群について

一、一号より三十三号まであり。一号、二号は三十年前、日子神社の境内を広める時掘り出し発見したものである。

二、三号より十一号までは、昭和三十三年二月より五月頃までに梅野氏の山を陶壘のため発掘せしものなり。其の時、此の所は朱で山を作ったのではないかと思われる。真赤な土質であった。

三、十二号より三十三号まで、昭和三十四年八月東大より発掘調査されたもの。
但し、十八号、十九号、三十一号は、以前に盗掘されてあったものである。

昭和三十四年八月十九日

近藤博士、東大より来り、船小屋の玉振館へ寄泊する。

八月二十日

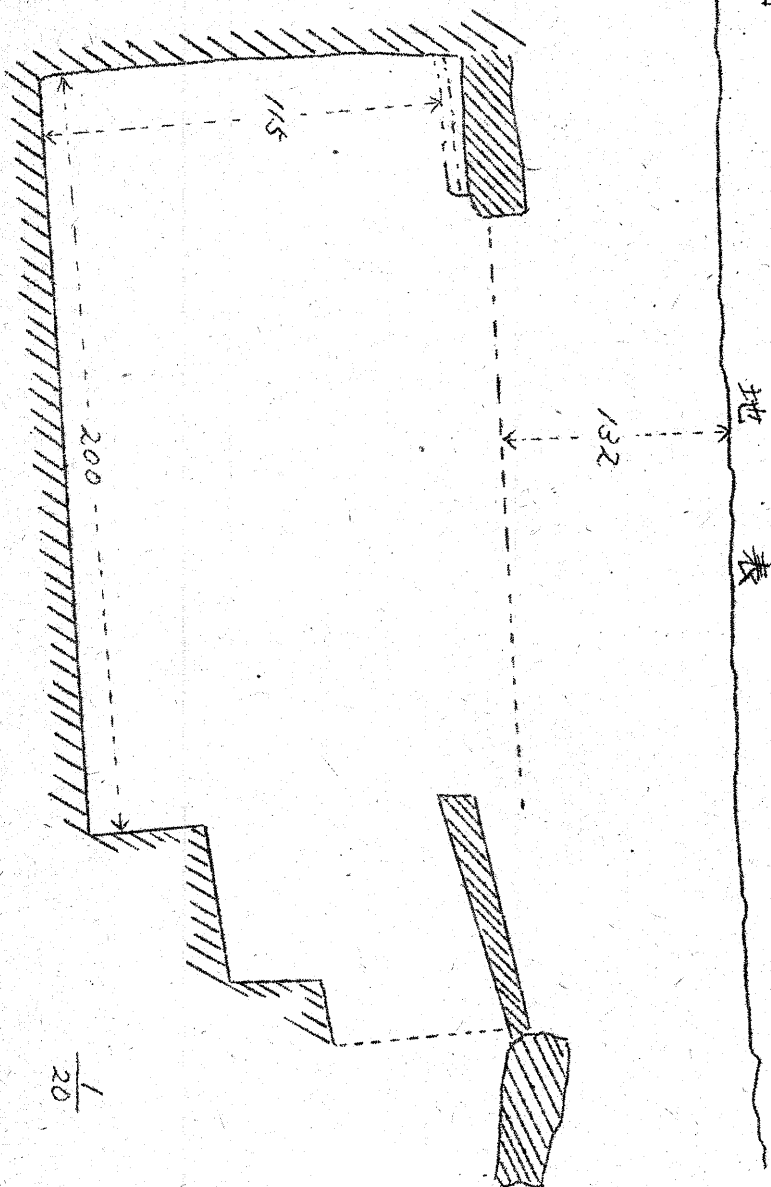
好天にめぐまれ早速午前九時より発掘にかゝる。

陶壘された密柑山を頂上まで登り、二人づつ三班に別れて、頂上、南側、北側と、おおよその見当をつけて掘り始める。南側は土が厚く、なか／＼古墳のふた石らしいものに掘りあたらぬ。北側は登頂した石に掘り当て、開けて中をのぞくと、盗掘された後らしく、何も入っていない。之が十九号である。

頂上もなか／＼深く、夕方やっといた石を掘りあてる。これは里穴古墳なり。西側の壁がくづれて、天井が落ちくぼんでいた。北側の隅の上をのけようと、スコップを入れたところ、人骨らしいものを掘り出し、よく見ると頭蓋骨である。土を静かにのけて、人骨は鈴木博士のこられるまで、

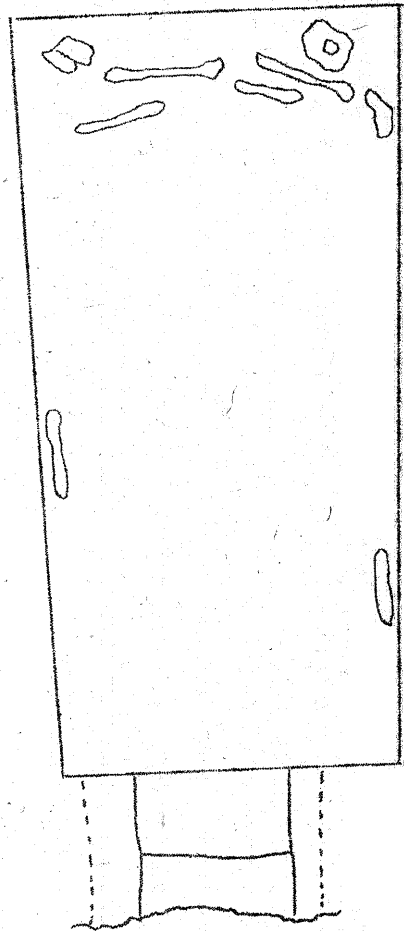
其のまゝにして置くとの 近藤博士の指示にしたがい 他の古墳をさぶす事にする。十六号古墳を
発見する。

16号図



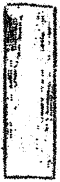
八月二十一日

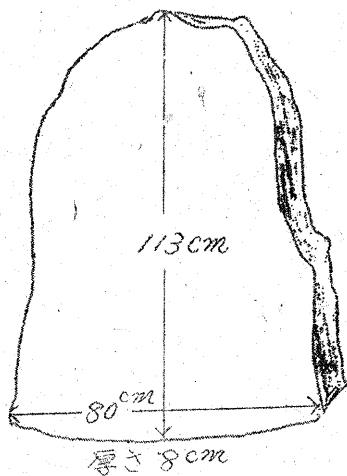
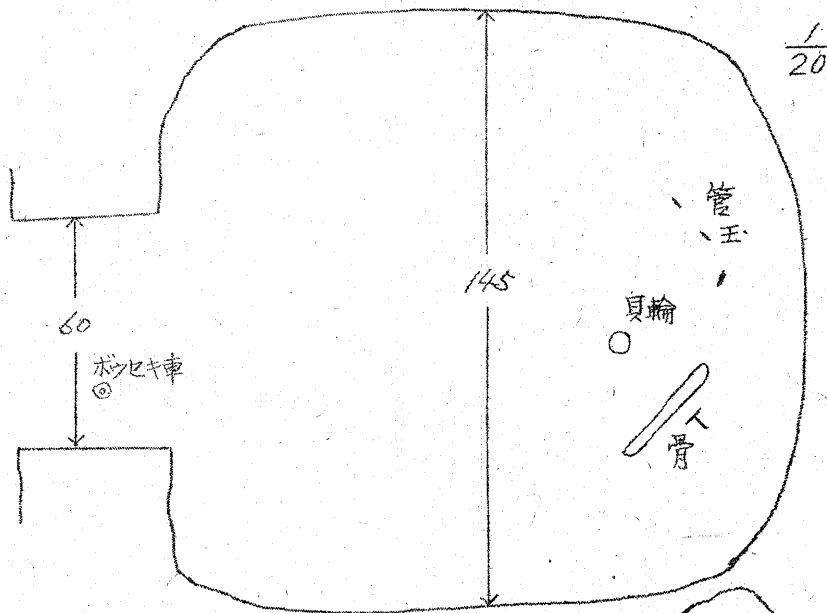
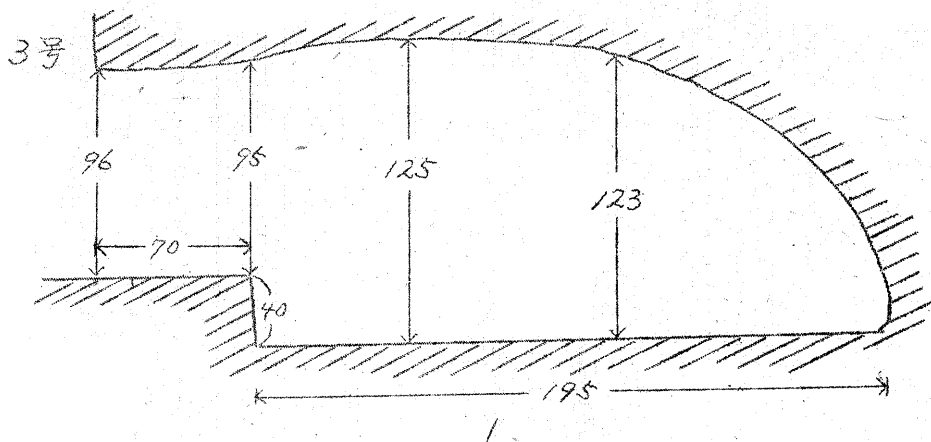
暑いので朝早くより仕事を始める。八時頃十三号のふた石を掘りあてる。此の古墳は横穴石室で、九時頃ふた石を開ける。中は雨水が流れ込み、泥がたまっている。土の下には何かあるのかわからないので、ていねいに土をのけるように頼む。厚さ五厘位たった土を少しづつのけて行くと、せん道より滑石の紡錘車、石室の中に管玉、貝、腕輪二個、耳輪（銀）、人骨の破片等出土。



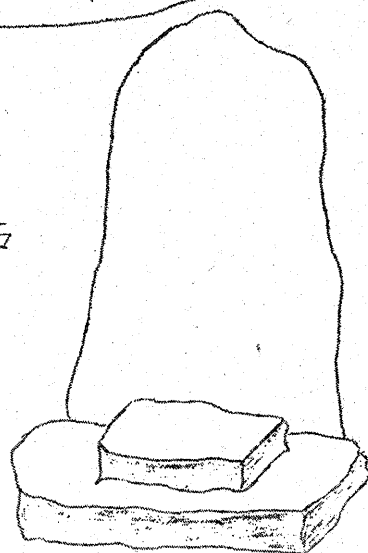
20/1

十三号図





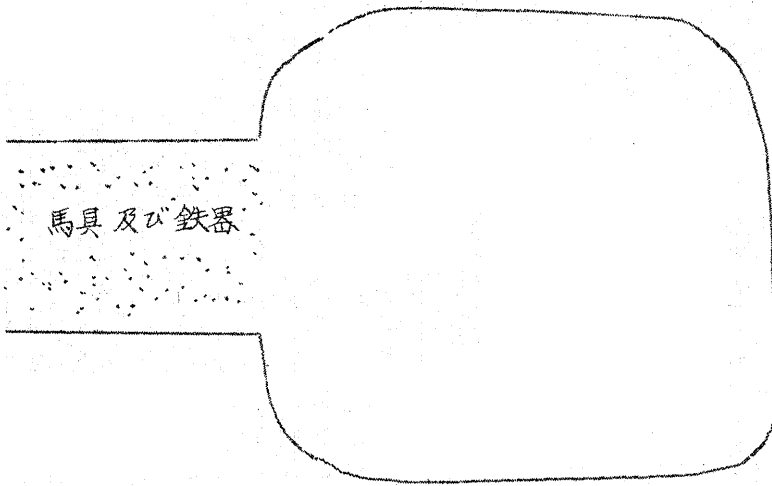
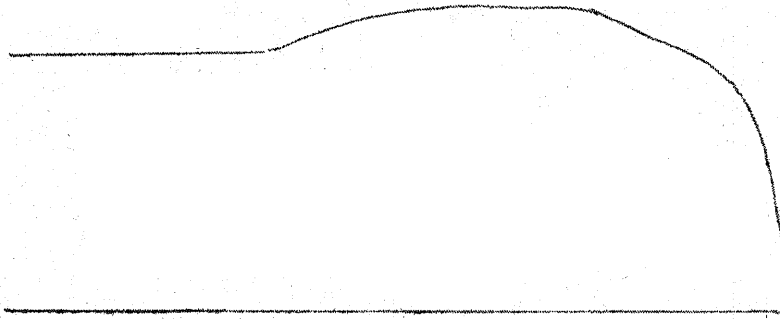
13号
フタ石



昼頃十五号のふた石が開く。義道長く、中が広い義道より、馬具、鉄器など出る。
近藤先生が、カーバイトをつけてカラー写真をとられた。午後玄室の泥をさらえたが何も出てこ
ない。

玄室の中に入ると、外気の暑さにくらべ、まるで冷房装置をしてあるように冷々として涼しい。

(オ十五号図)



十一時 堀伝氏来る。

午前中北側を掘ったので、午後は南側をさがす事にし、皆でそれぞれ見当をつけて、あちらこちらと掘っている。連日の炎天下の仕事であるが、皆張り切って、汗を流し、赤土にまみれて一生懸命掘っていたが、どうしても当たらない。すっかり皆疲れたらしいので、少し日蔭をと、北側の雑木林の中を掘る事にする。夕方二十号のふた石を掘り当てる。

八月二十二日

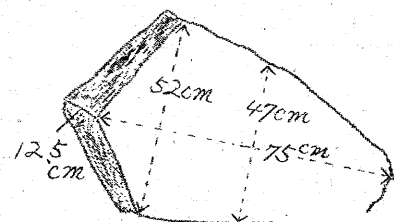
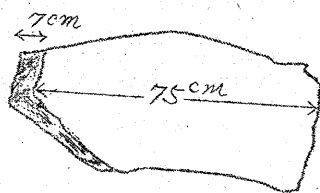
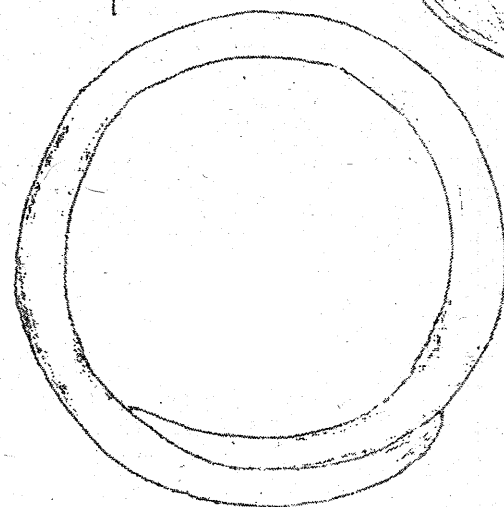
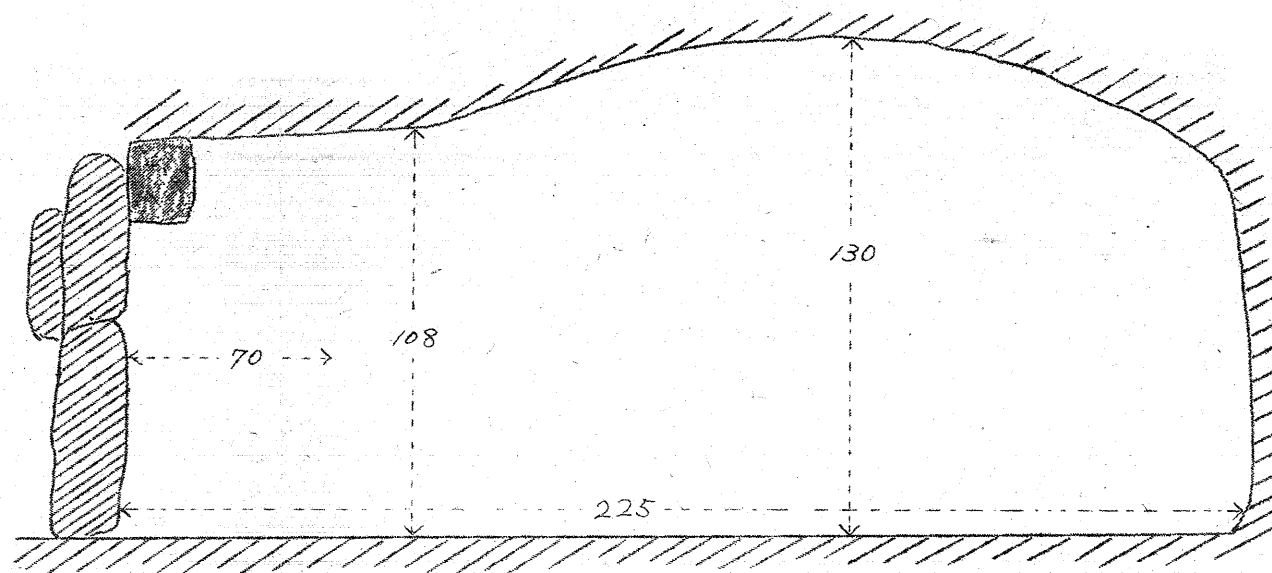
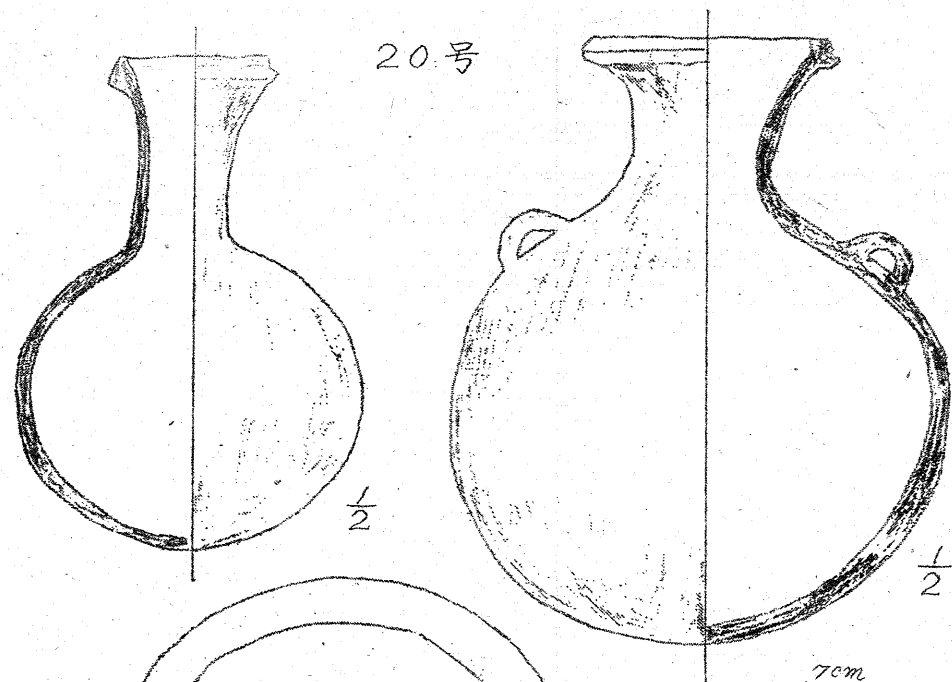
昨夕掘りかけた二十号をたのしみに皆で元氣よく出かける。二段になったふた石を、上の段三個をヒリのけ、中をのぞくと古墳特有の臭氣が鼻をつく。うす暗い中に須恵器の口がこちら向き、其の上に向い線のX印が目に入り、其の向ふに人骨が整然と並んでいた。なおよく見ると、貝腕輪、短剣、耳輪など副葬品のある事も確認された。近藤博士の指示にしたがい、そのまゝ再びふた石をもとどけにし、鈴木教授のこうれてから調査する事にする。

(オノ二十号図)

八月二十三日 休日

八月二十四日

午前中盗掘されていた北側斜面十九号と三十一号の中間が未発掘のようであるから掘ってみる。之が三十号古墳である。此の古墳の特徴は美道の入口ふた石の後に、高さ一米位の門の様に石組み



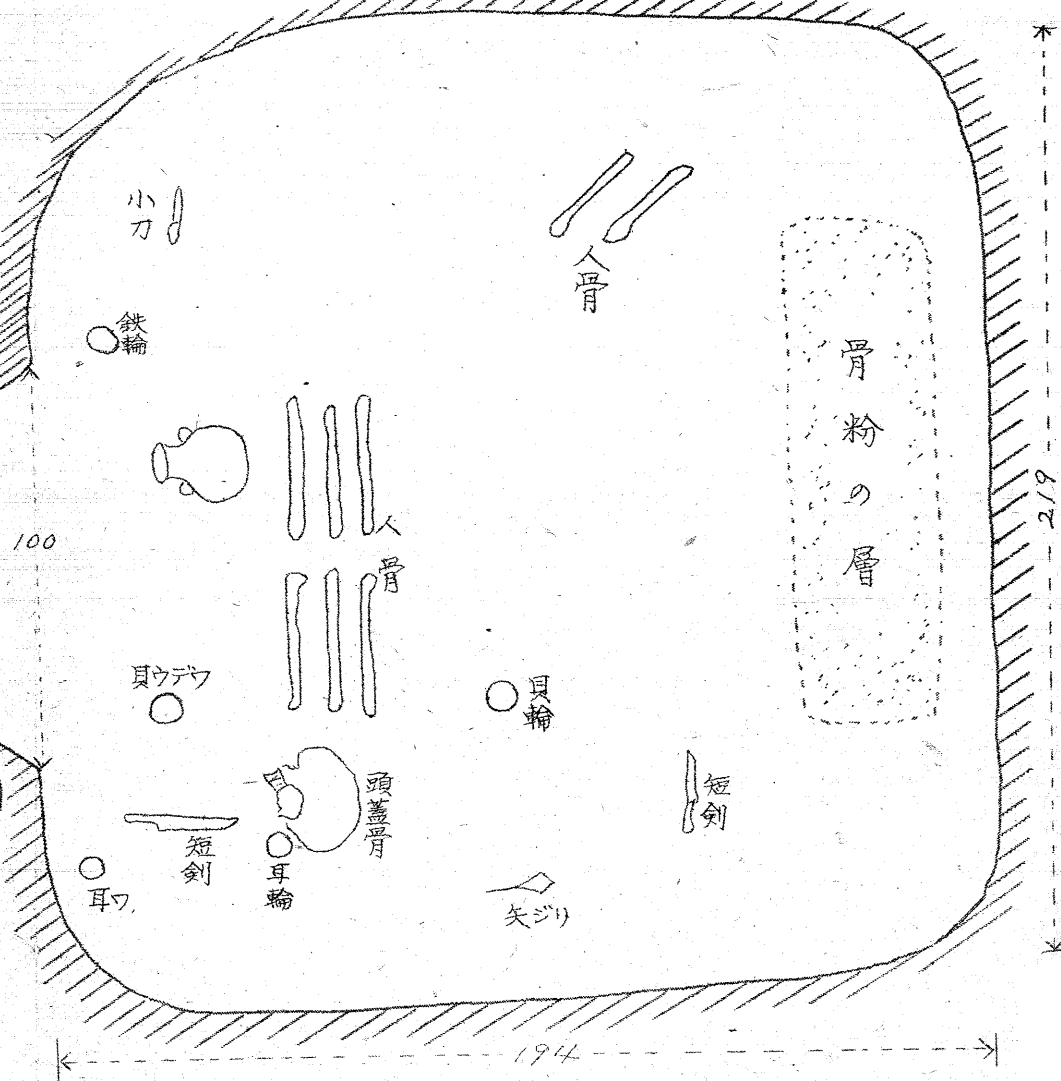
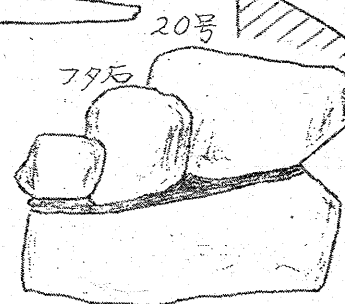
20号



$\frac{1}{2}$



$\frac{1}{2}$



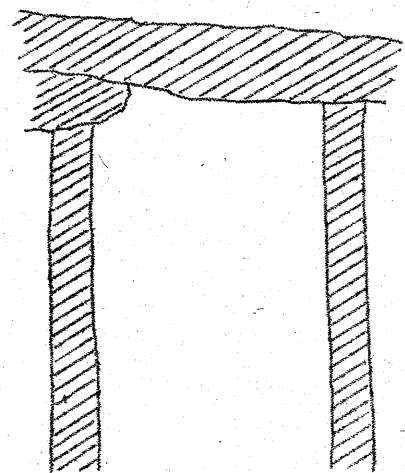
してある事で、羨道は長く、約二米位で、玄室内には人骨の破片及び須恵器の破片が散乱していた。
(第三十一号 及び第三十号四)

午後、南側の斜面の下の方で、蓋石を見つけたという声だったので行ってみると、蓋石は三重になつていて、羨道は短かく、蓋石のすきまより土が流れ込んでいた。玄室は盤岩をくりぬいたもので、天上の岩が玄室の中央にくずれ落ちていて、人骨及び副葬品の多いのは、一号より三十四号迄の内で、之の右に出るものはなかった。一応内部を見て又ふた石をして土をかけ、鈴木教授の来られるまでこのまゝにしておく事にする。鈴木教授が二十六日に来られる連絡を受ける。

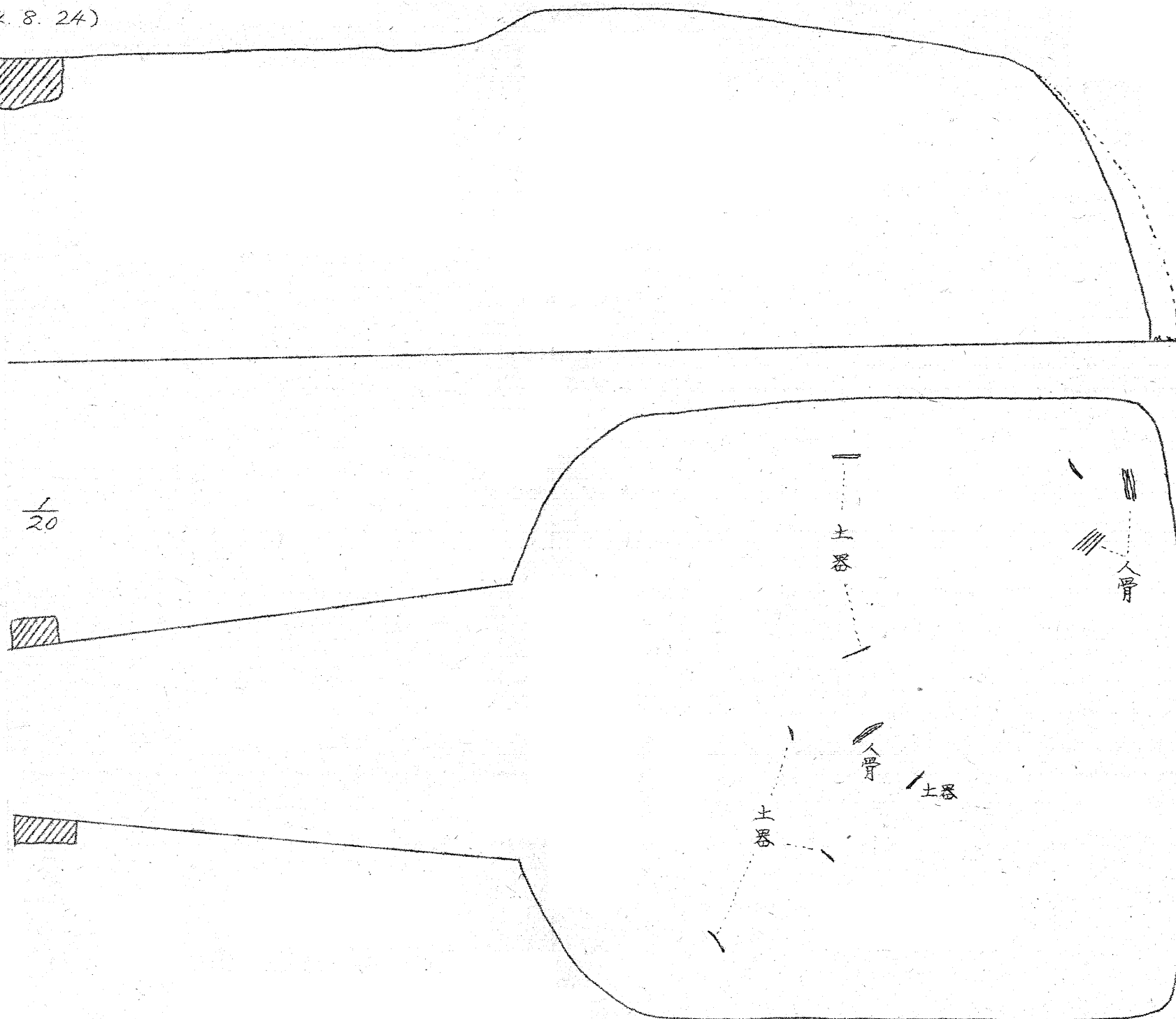
八月二十五日

三十三号を掘る。形の変わった須恵器及び土師の土器出る。玄室はくずれ落ちて発掘不可能であつた。十二号及び其他の古墳を掘る。

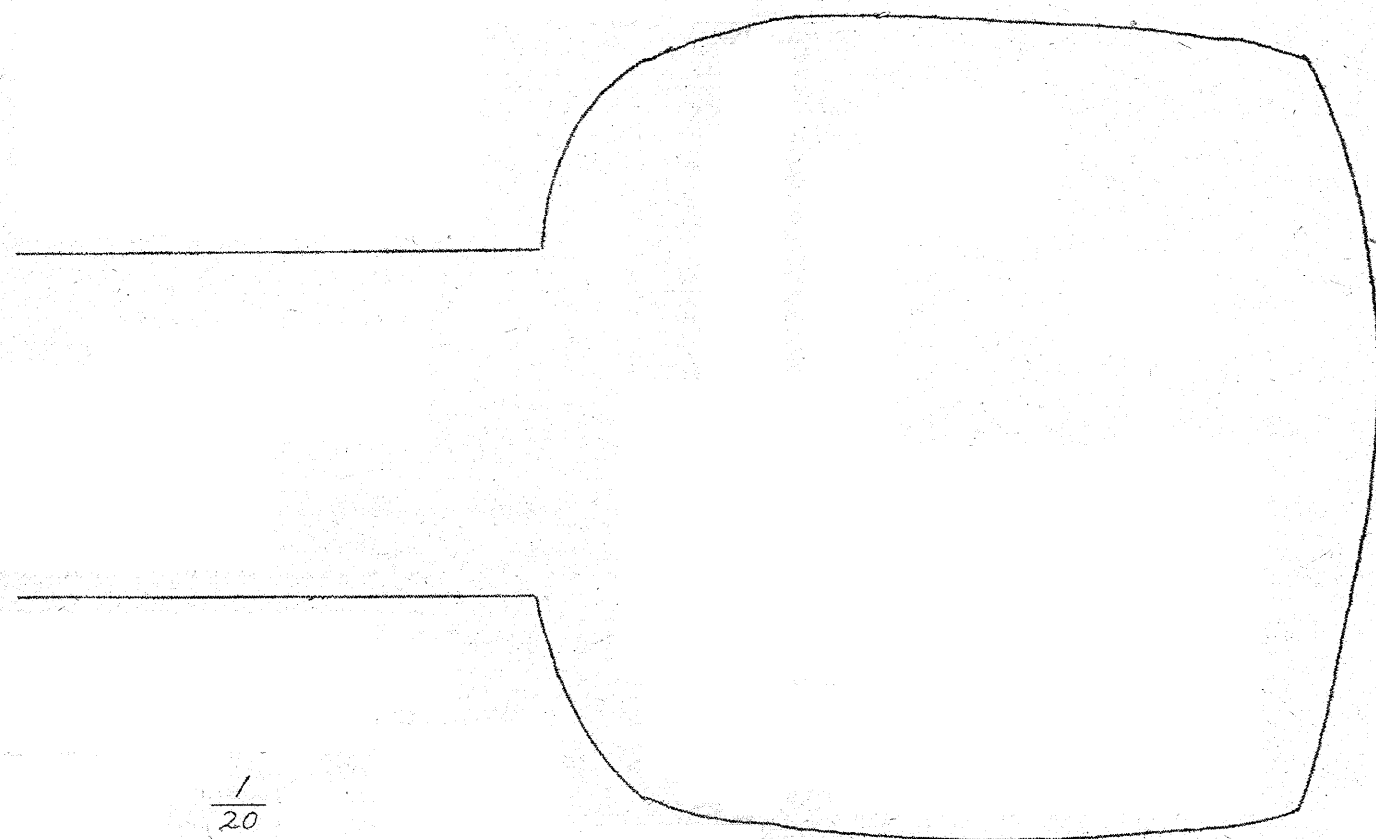
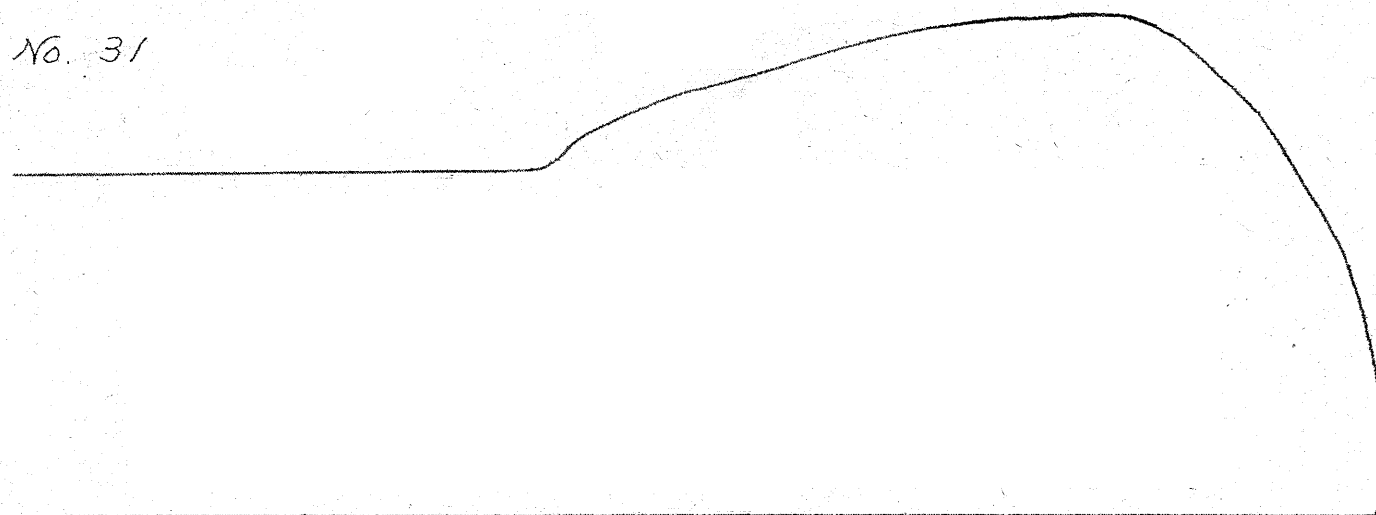
No. 30号 (S34.8.24)



$\frac{1}{20}$

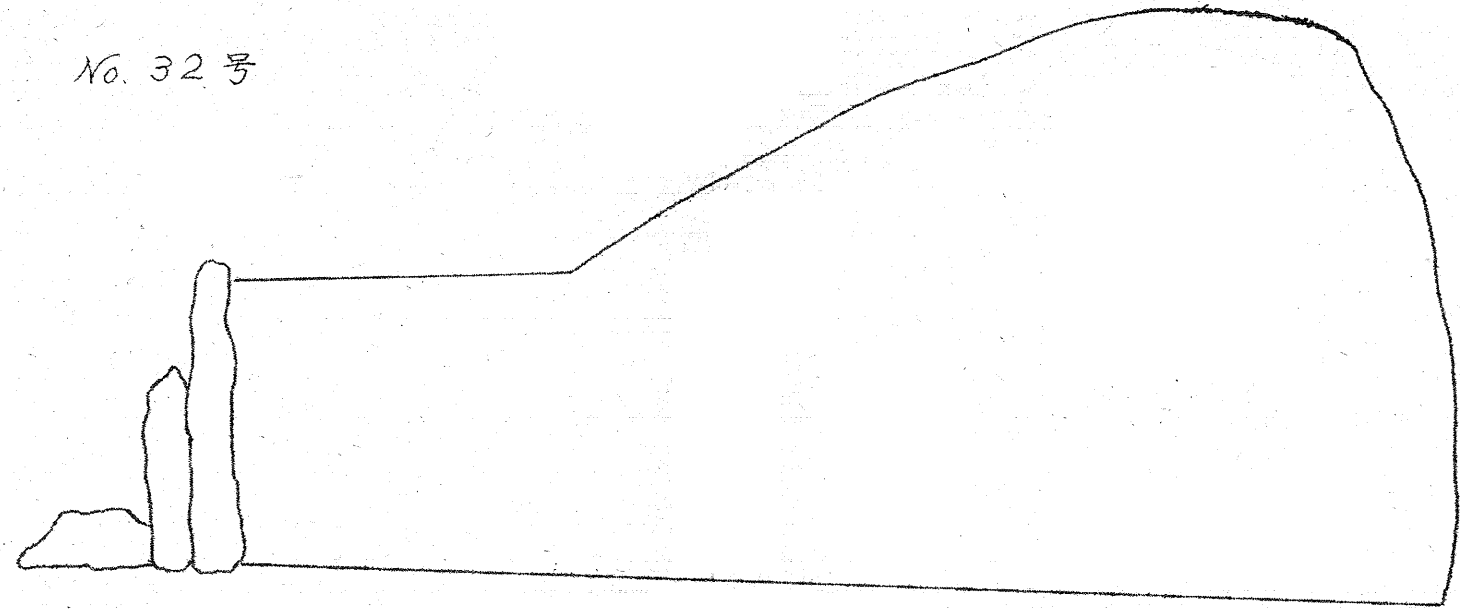
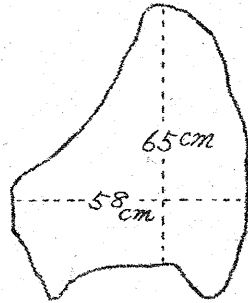


№ 31



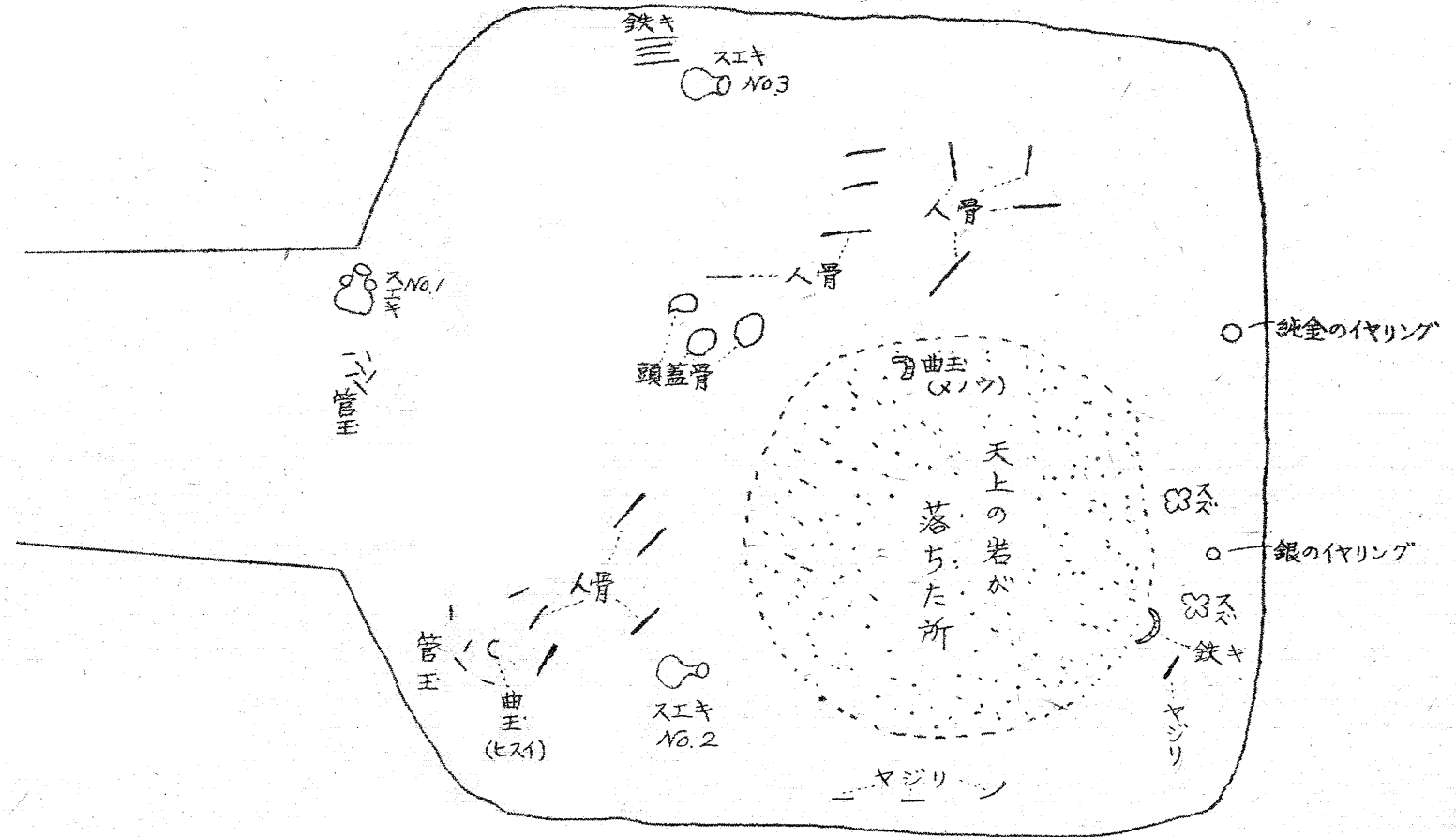
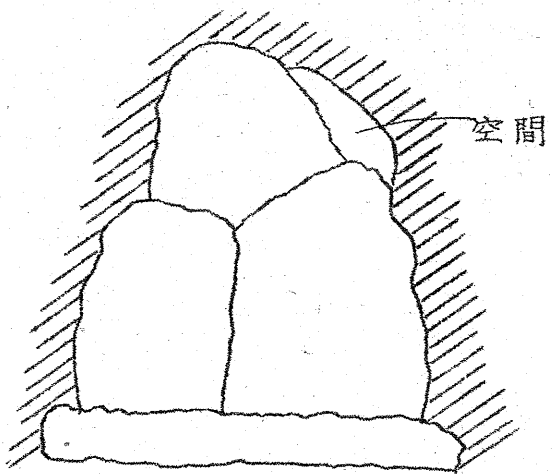
$\frac{1}{20}$

No. 32 号

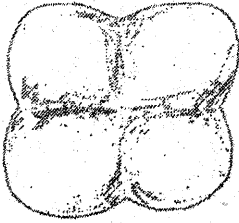


$\frac{1}{20}$

此の中に純銀のイヤリングとガラスの玉が入っていた



32 号



ガラス

32 号



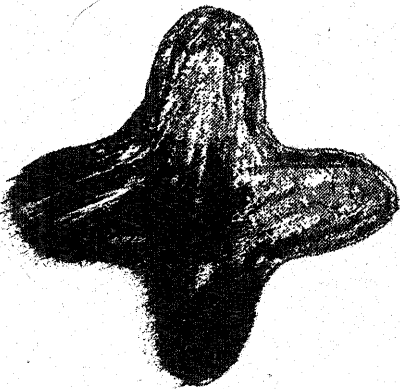
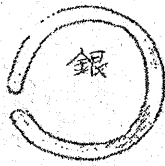
全部現寸



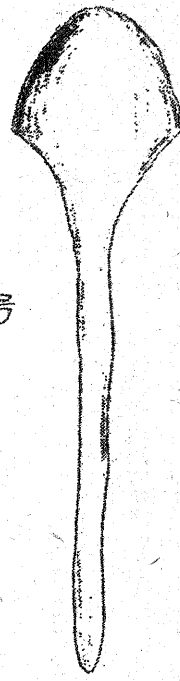
ガラス



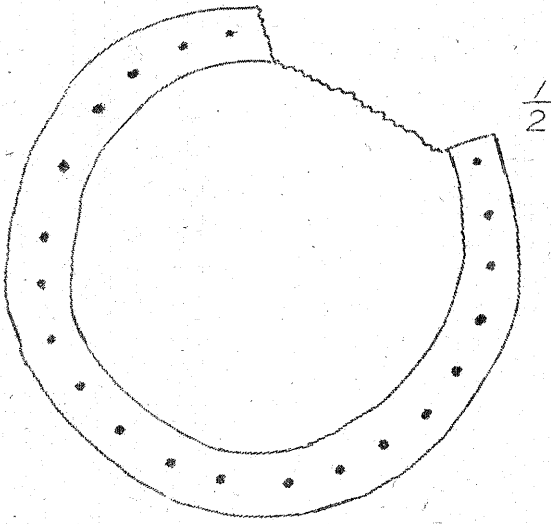
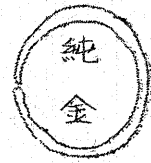
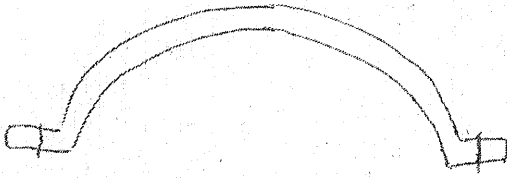
ガラス



32 号



32号

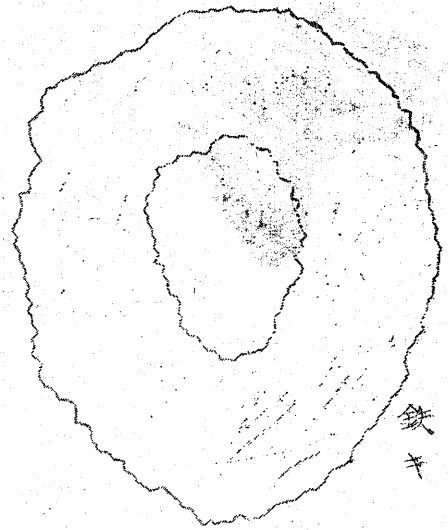


現寸

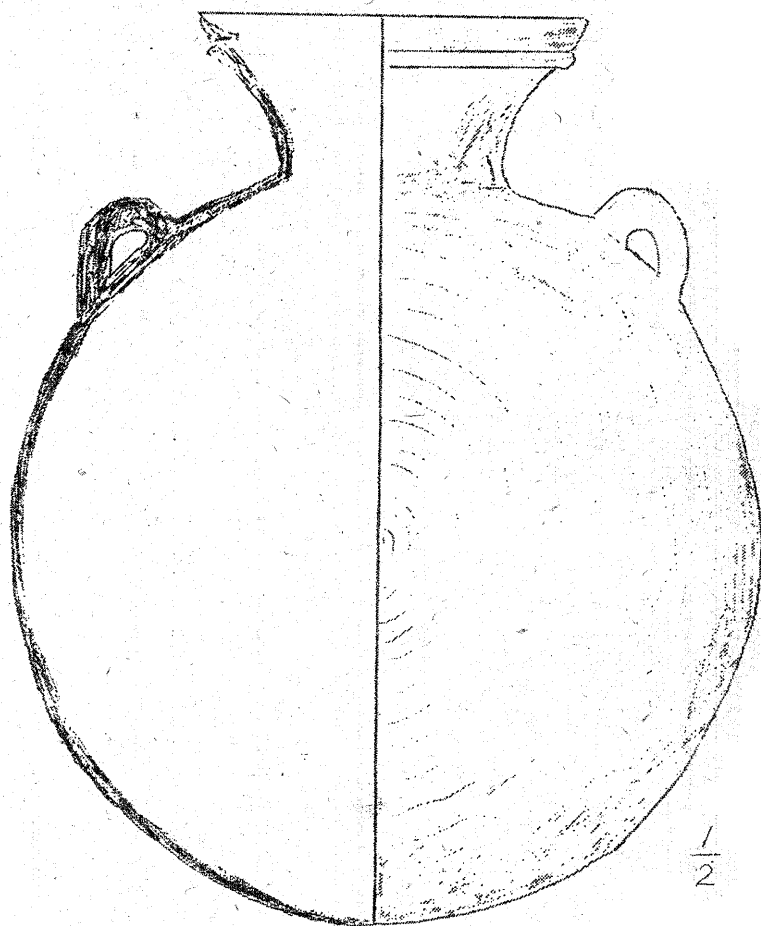


32号

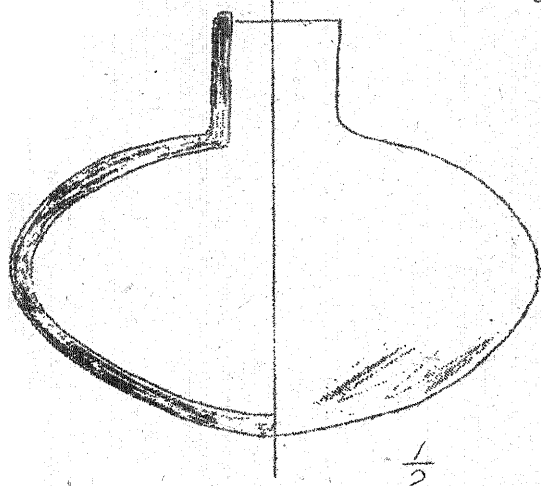
ガラス玉



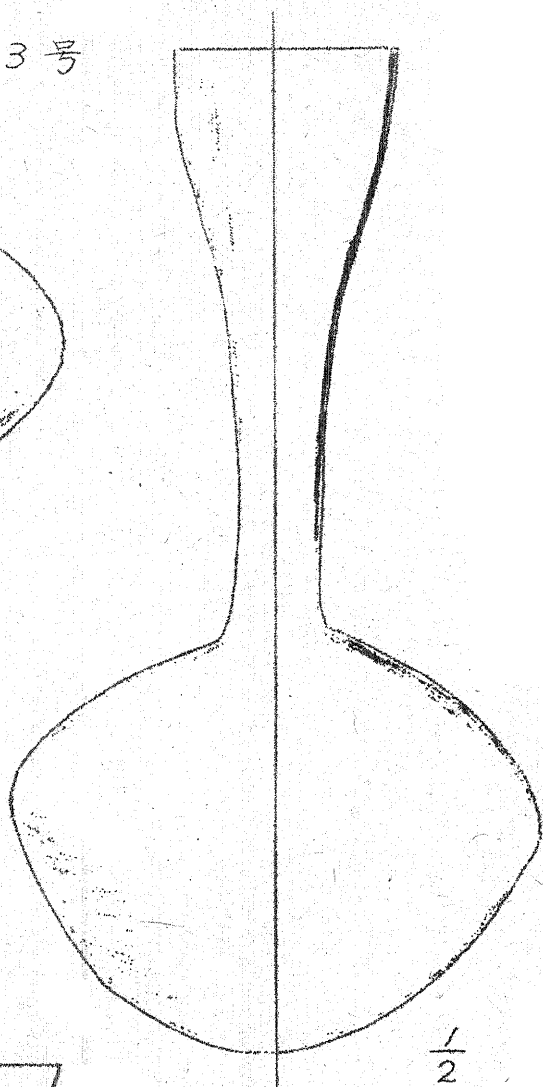
32 号



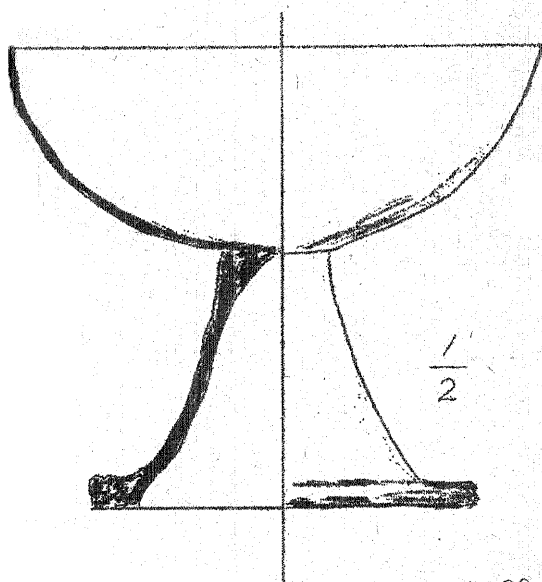
33 号



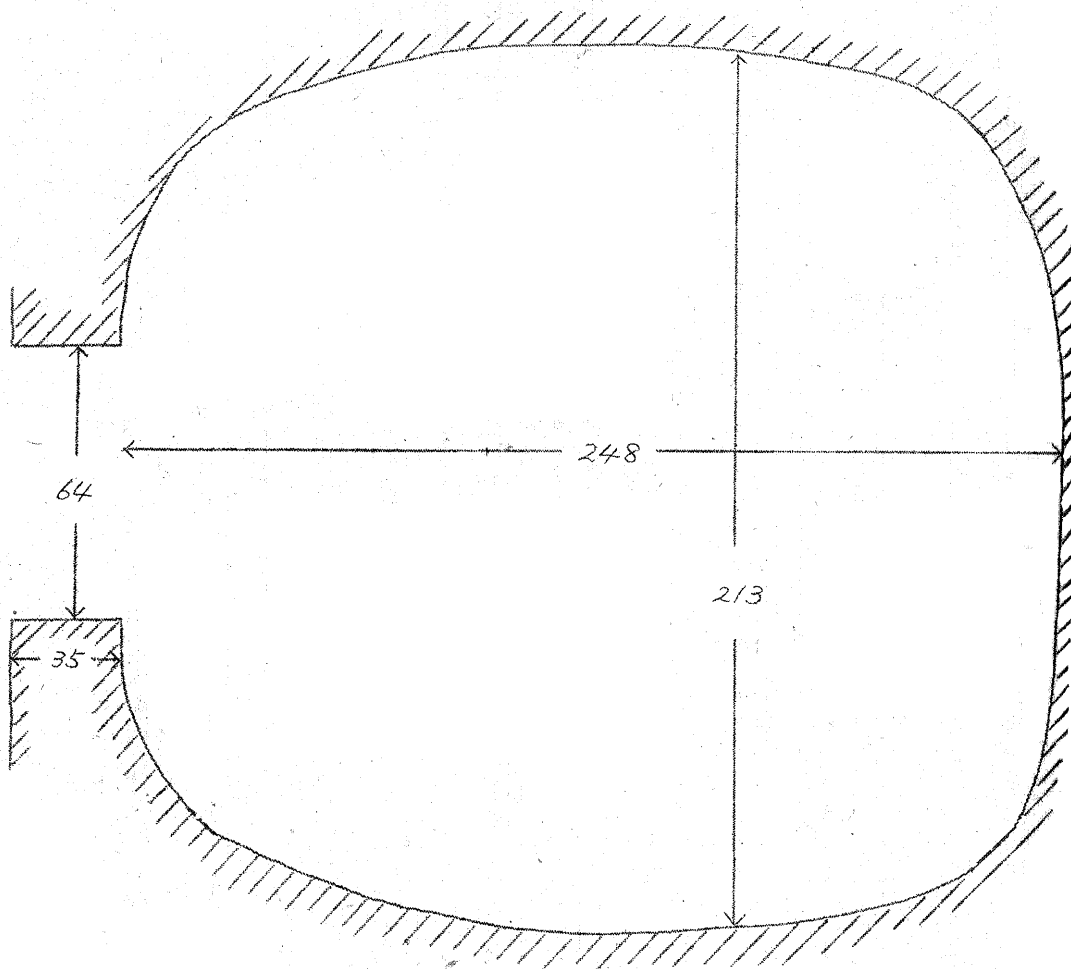
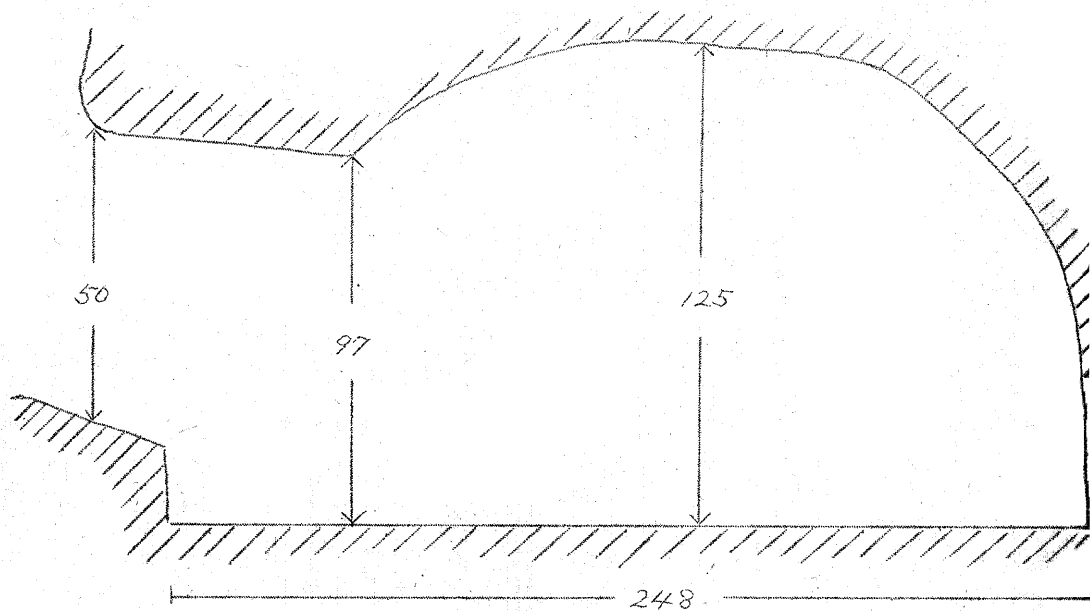
$\frac{1}{2}$

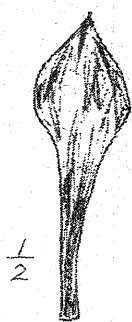


$\frac{1}{2}$



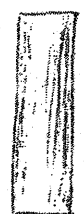
$\frac{1}{2}$





$\frac{1}{2}$

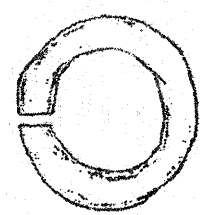
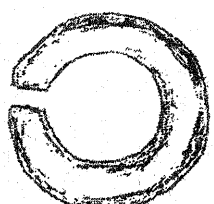
12号



現寸



$\frac{1}{2}$



12号

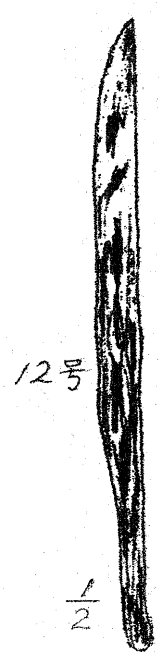


12号

スイシヨウ



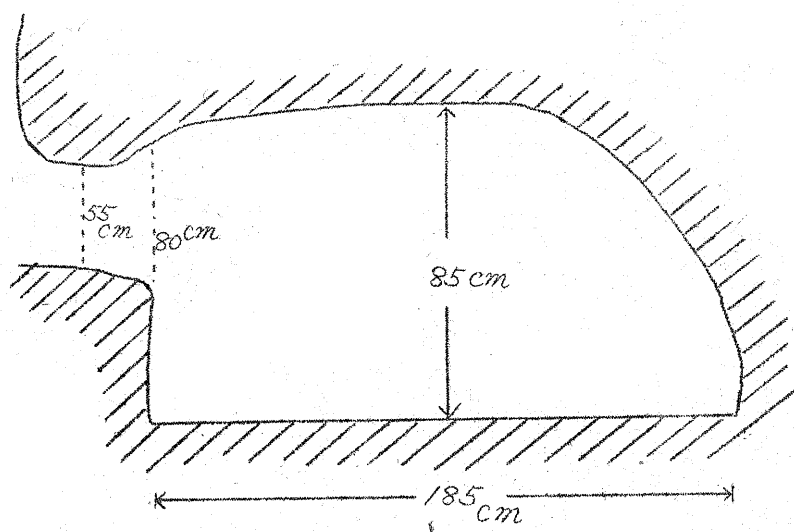
12号



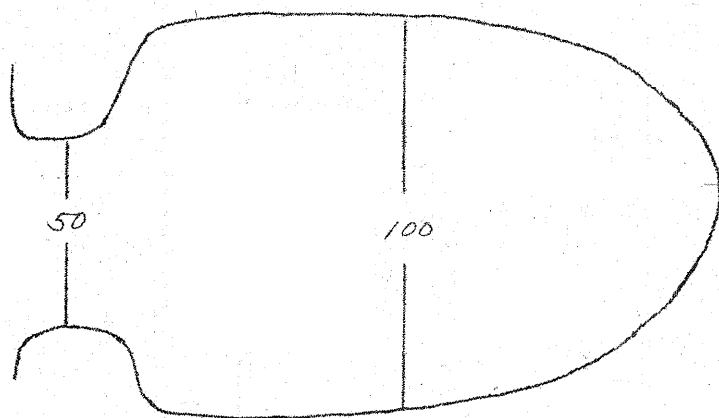
12号

$\frac{1}{2}$

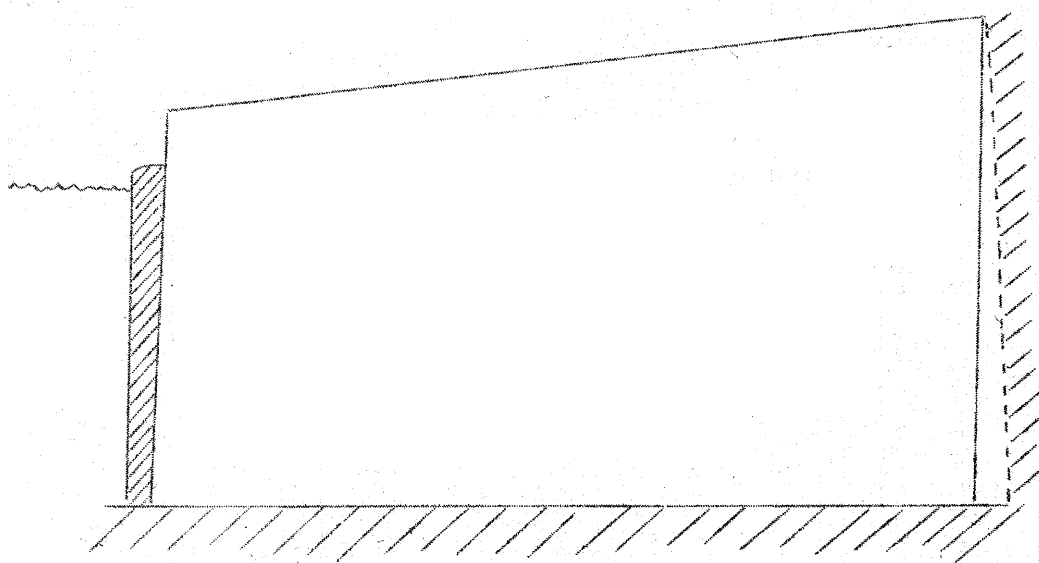
3 号



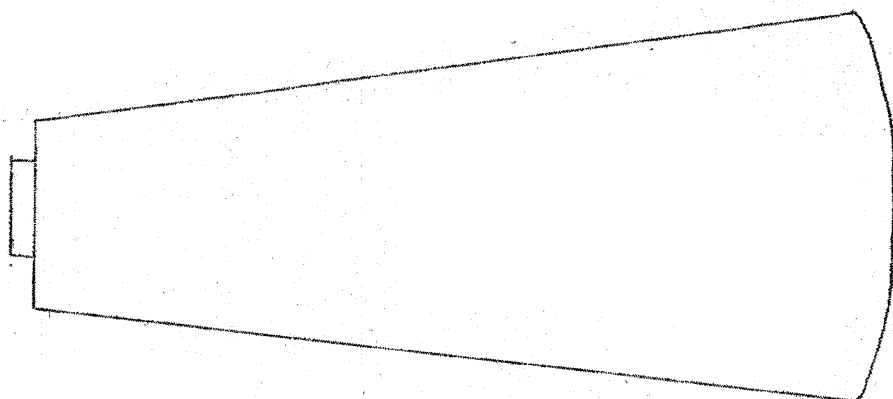
$\frac{1}{20}$

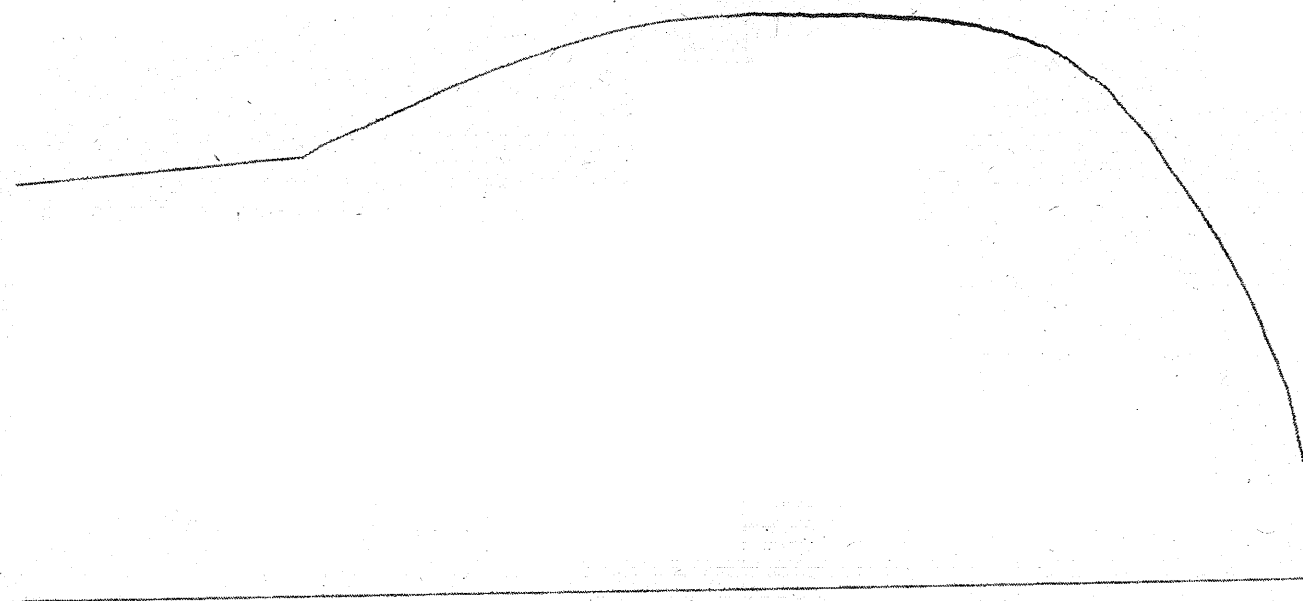


14 号

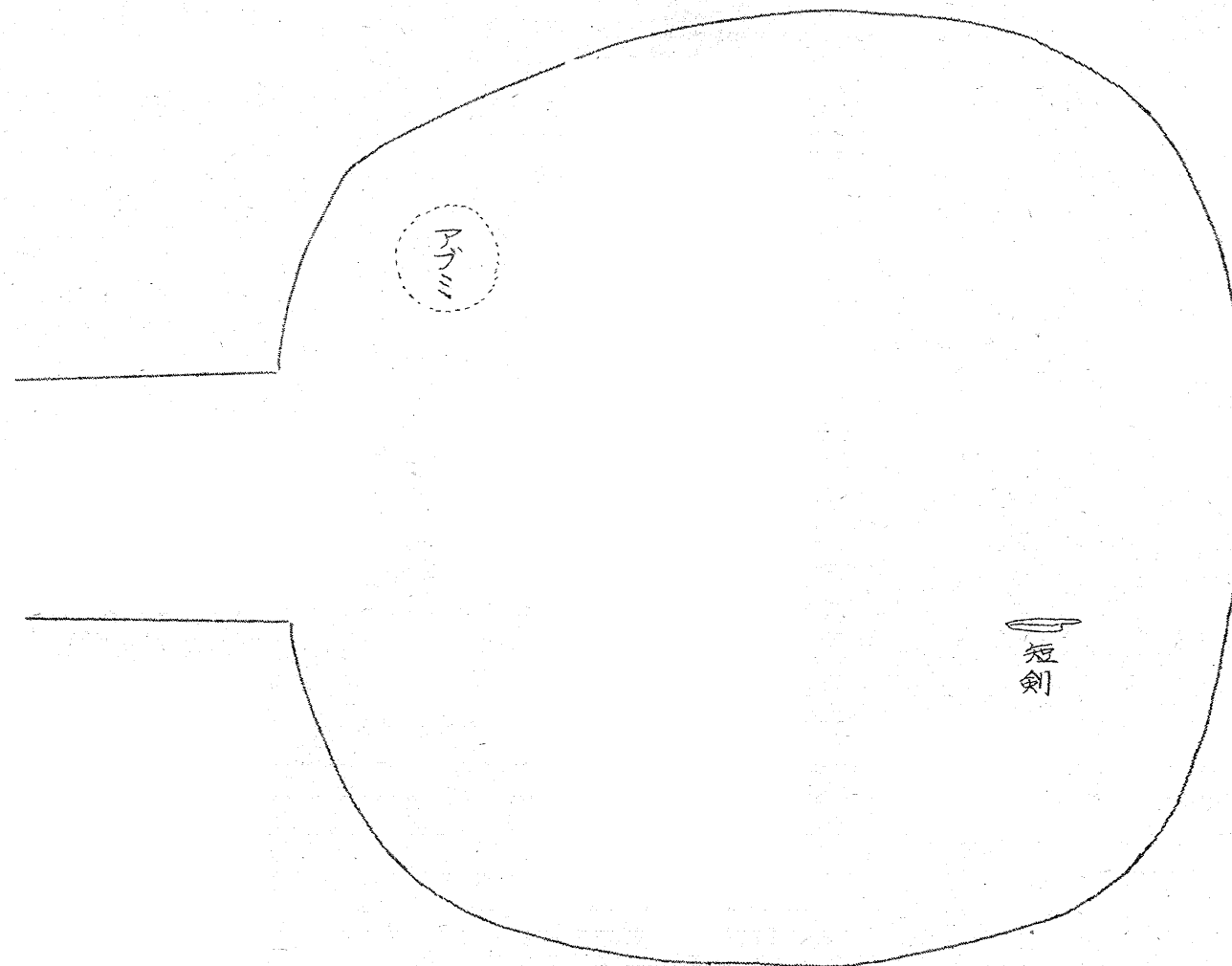


$\frac{1}{20}$

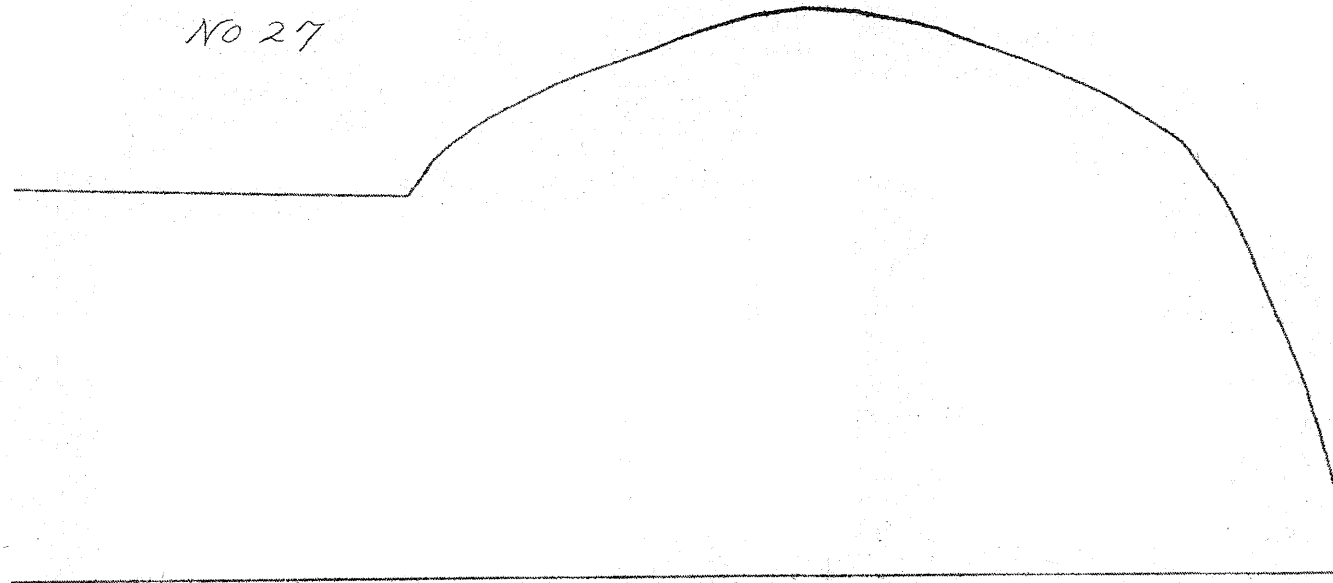




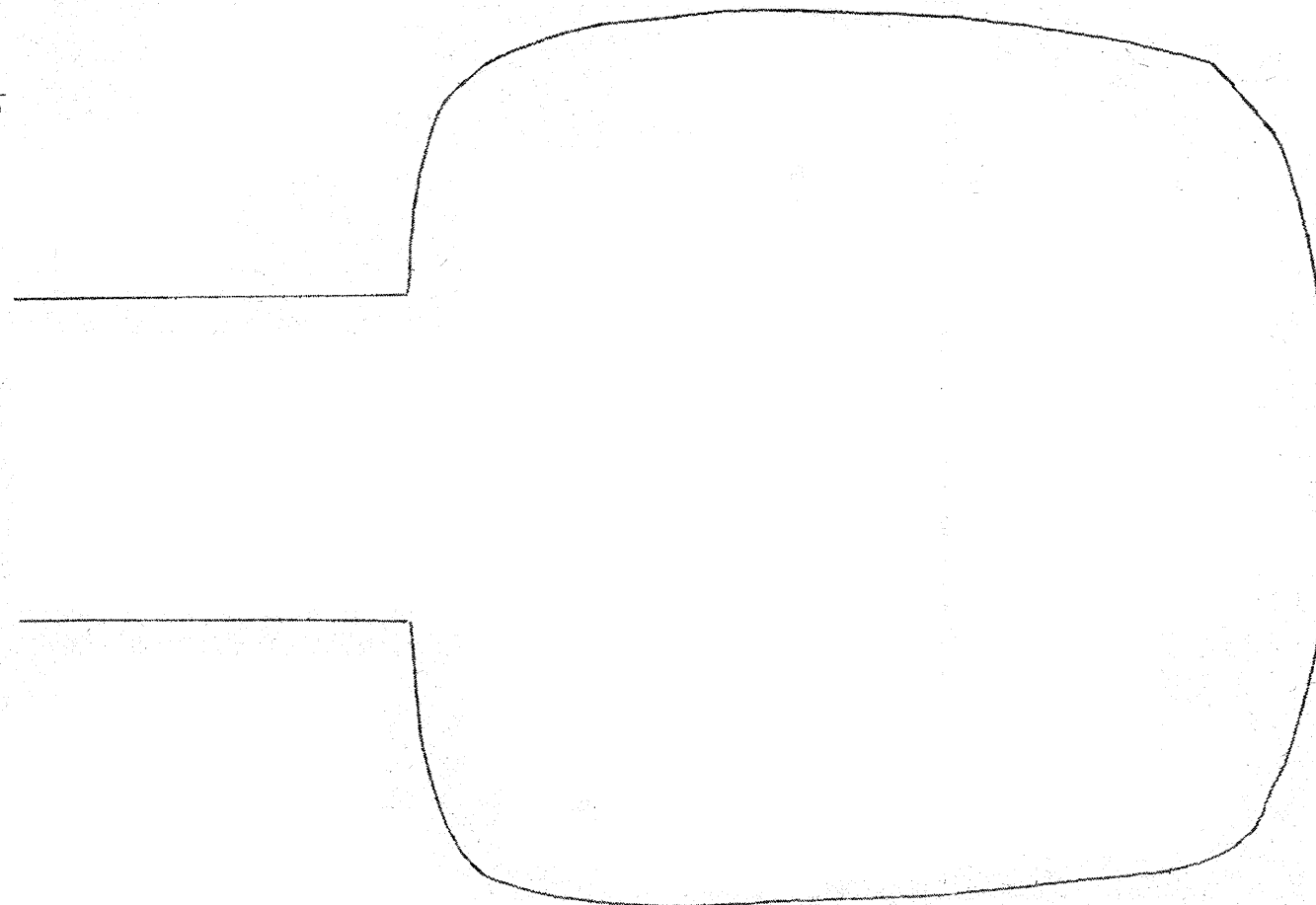
$\frac{1}{20}$



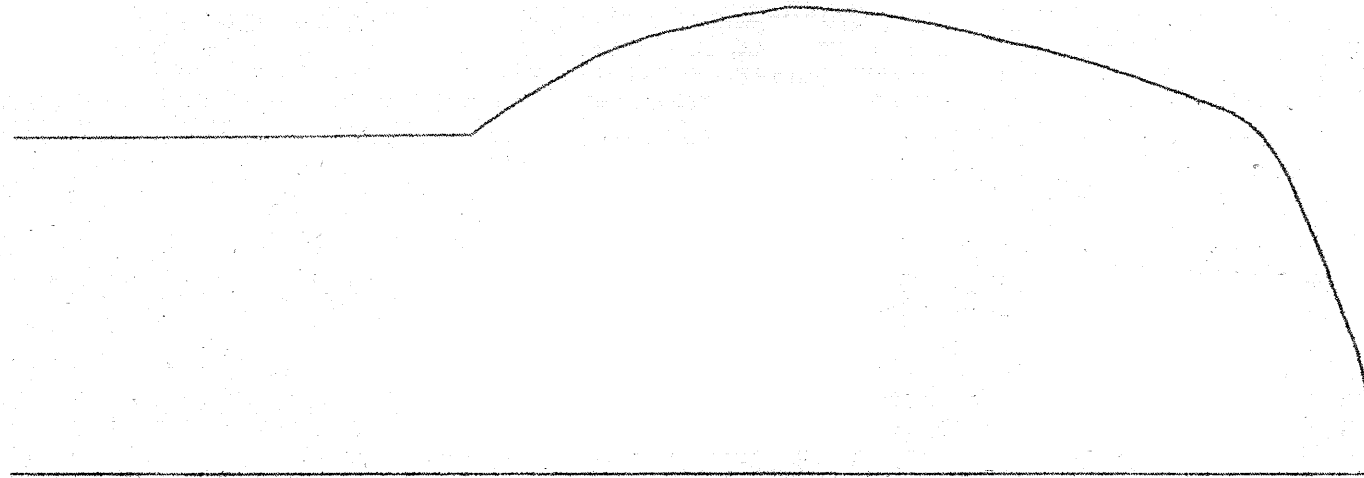
№ 27



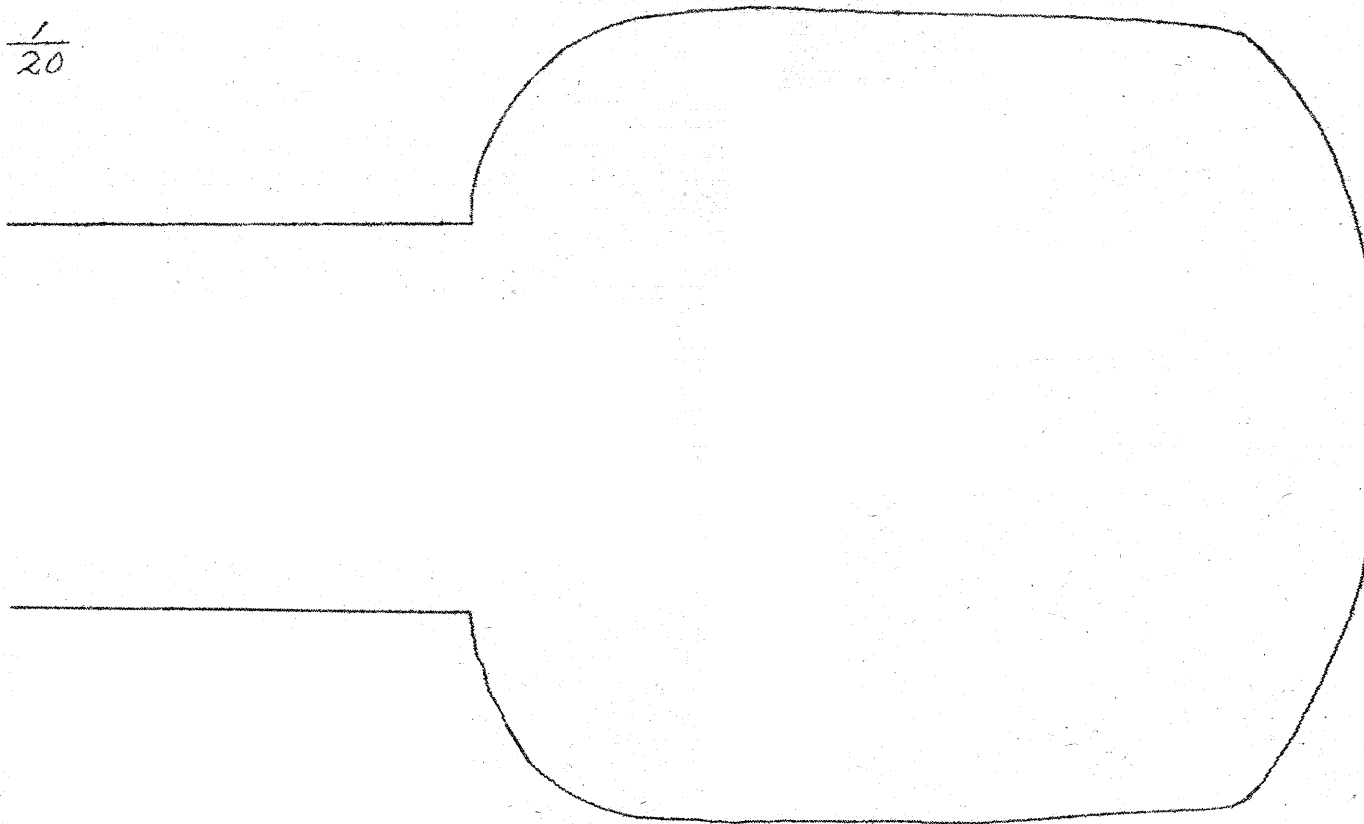
$\frac{1}{20}$



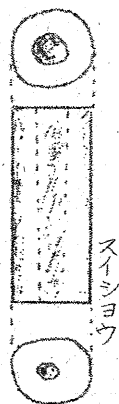
No 29



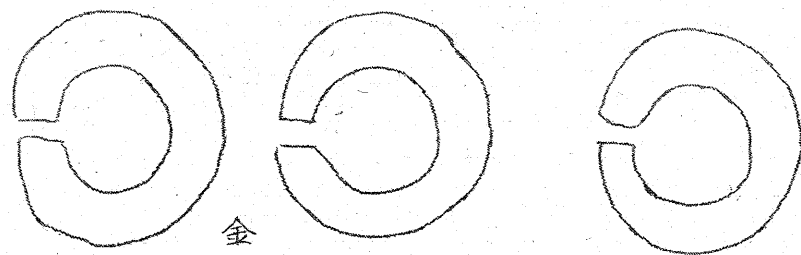
$\frac{1}{20}$



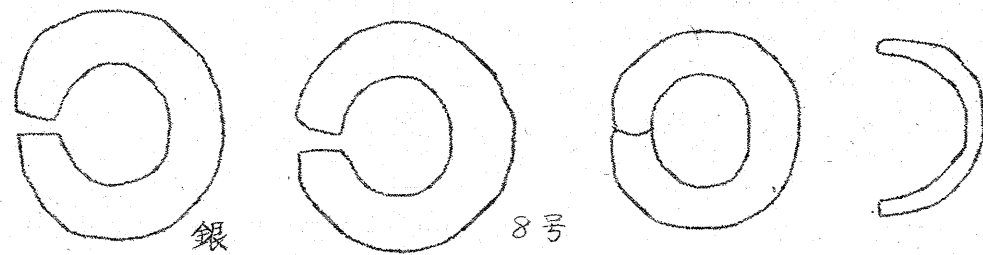
No. 8 号



スィシヨウ

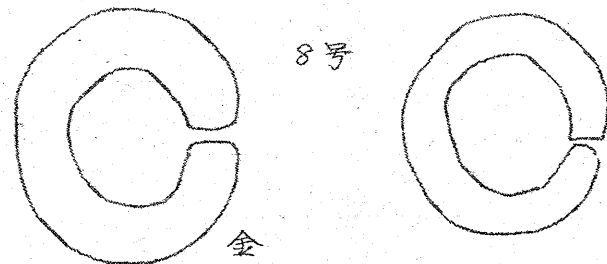


金



銀

8号



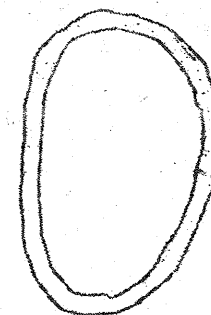
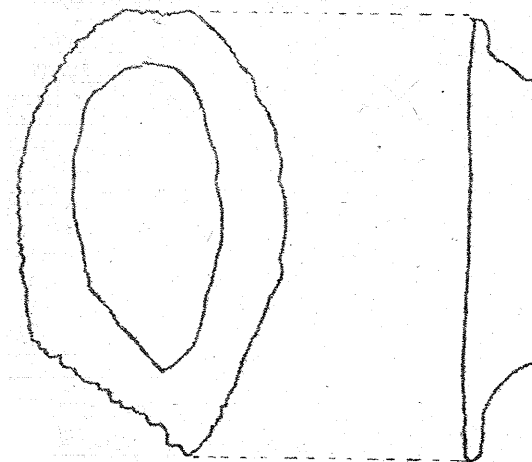
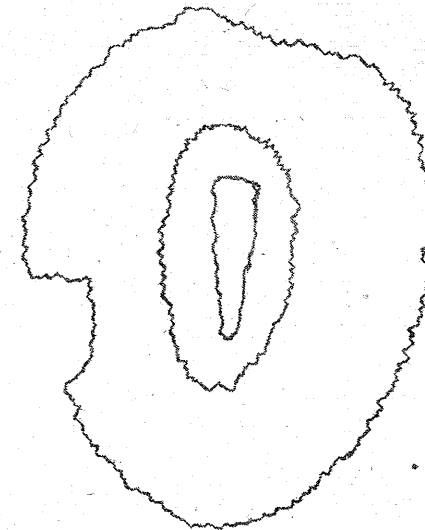
8号

金

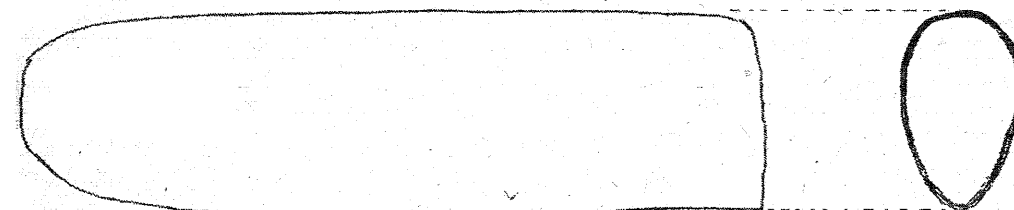
S. 33 年 2 月

8 号

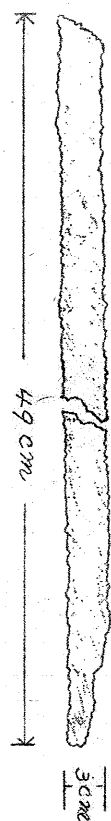
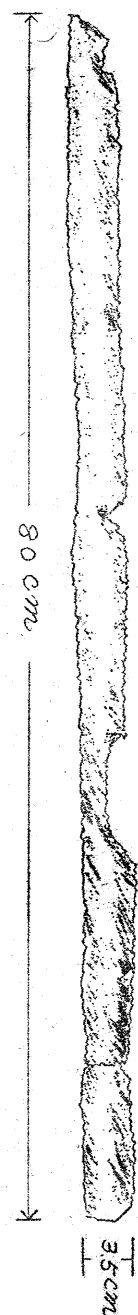
現 寸



8 号

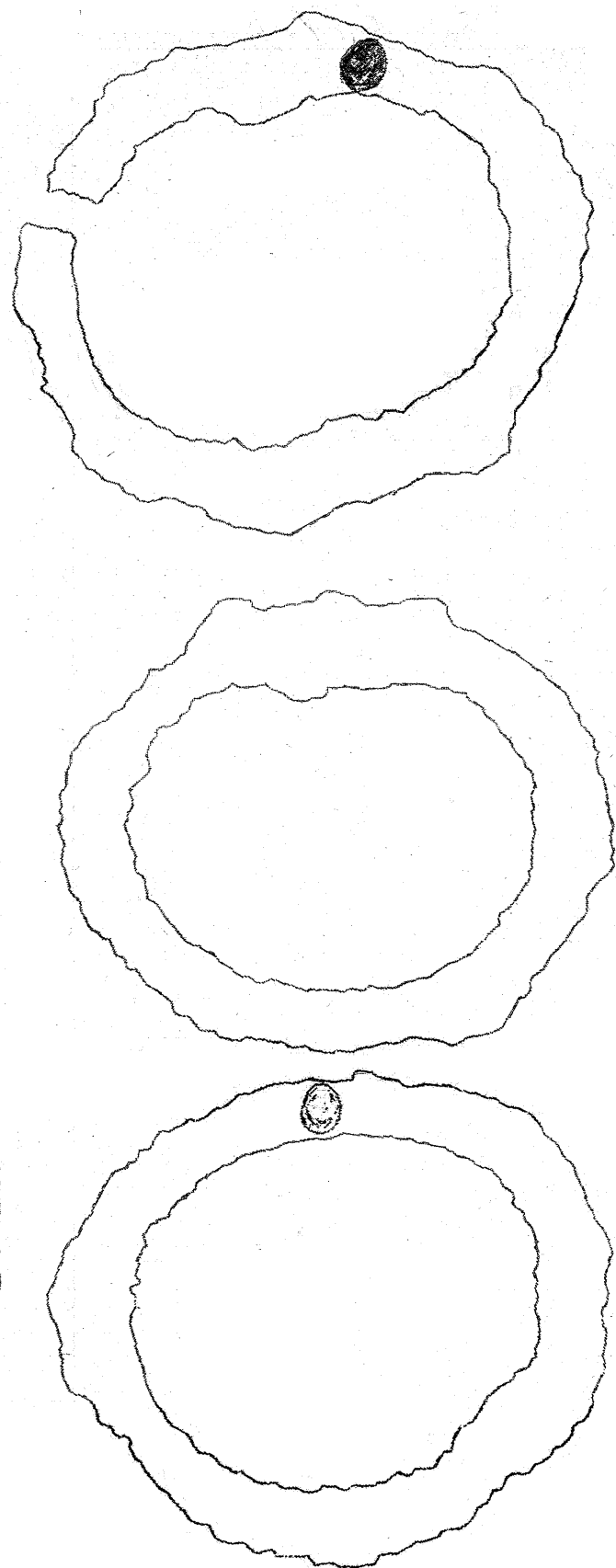


33年2月
8号

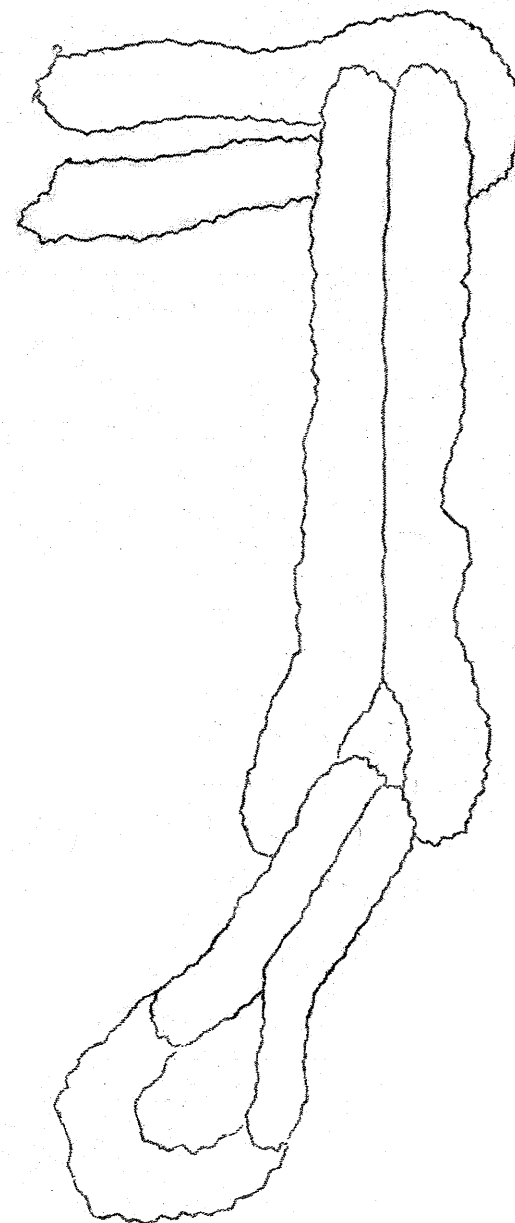
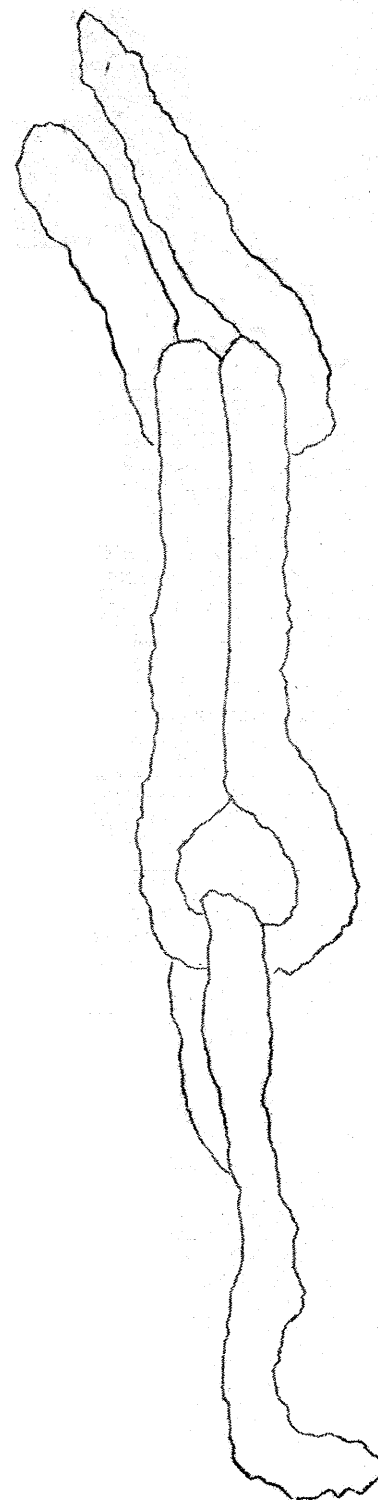


$\frac{1}{5}$

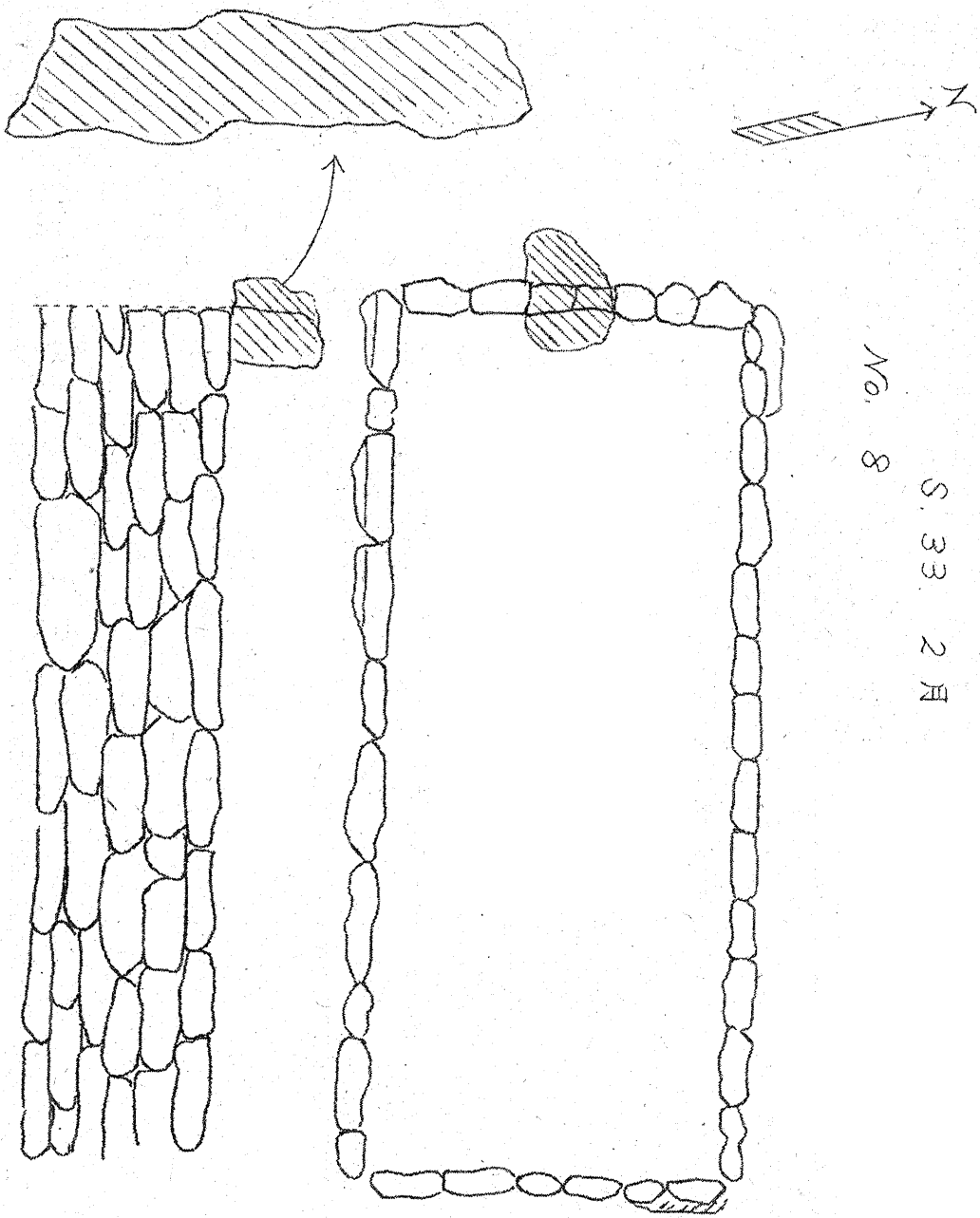
- 35 -



33. 2
8号 現寸

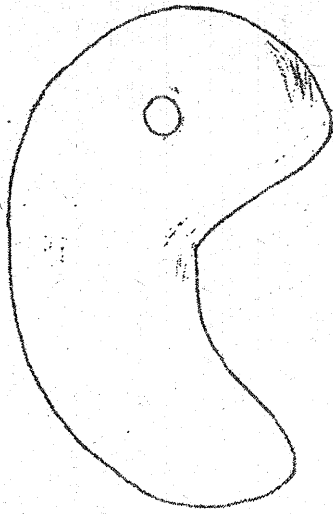


S. 33. 2 月
No. 8



$\frac{1}{20}$

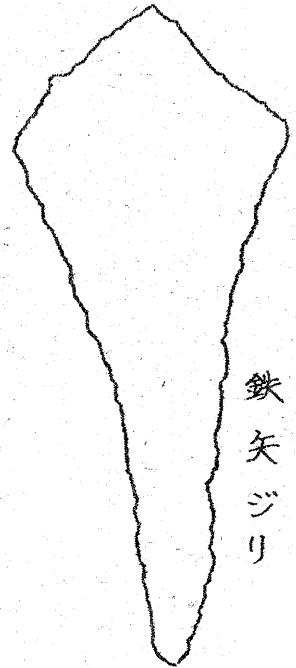
長谷出土



現寸



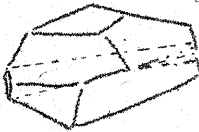
ガラス



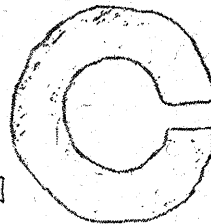
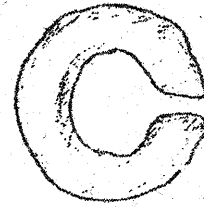
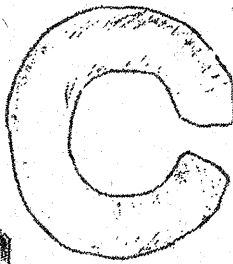
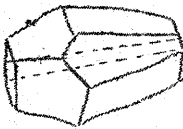
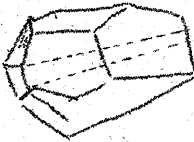
鉄矢ジリ



ヒスイ
現寸



キリコ玉



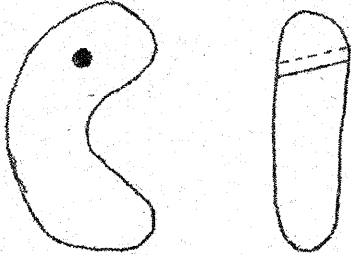
現寸

外5個

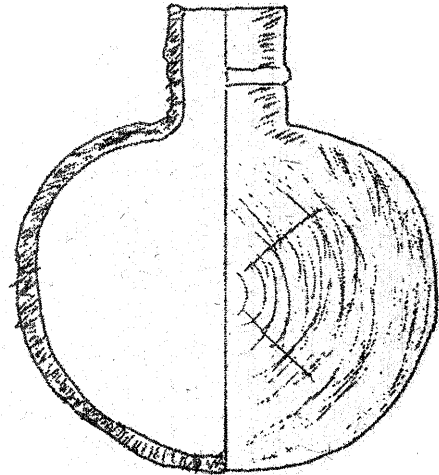
古塚山出土

S. 25. 12.

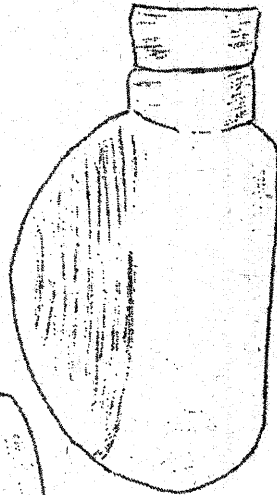
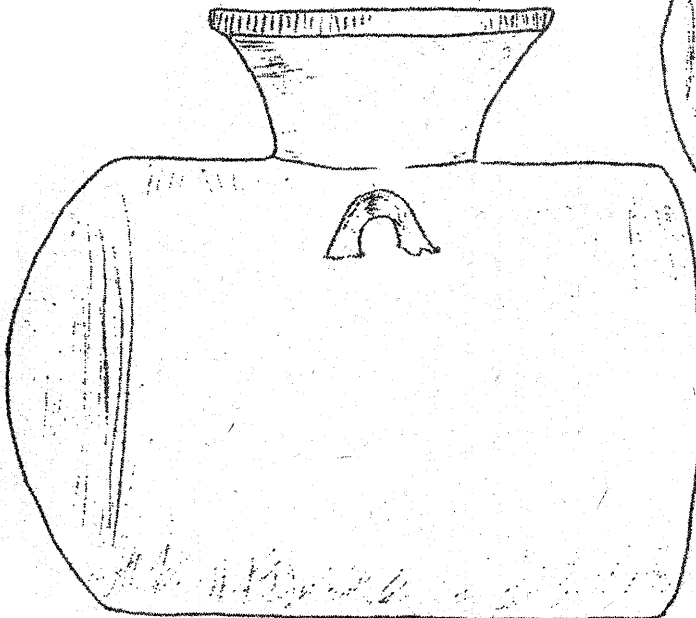
現寸



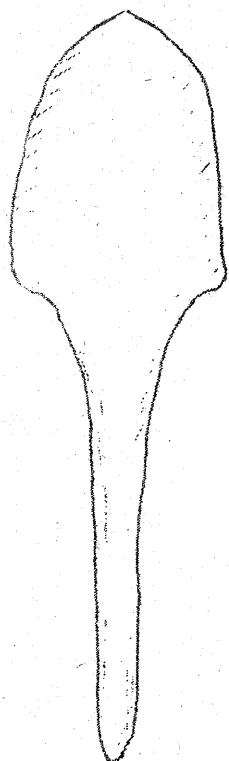
メノウ



$\frac{1}{2}$



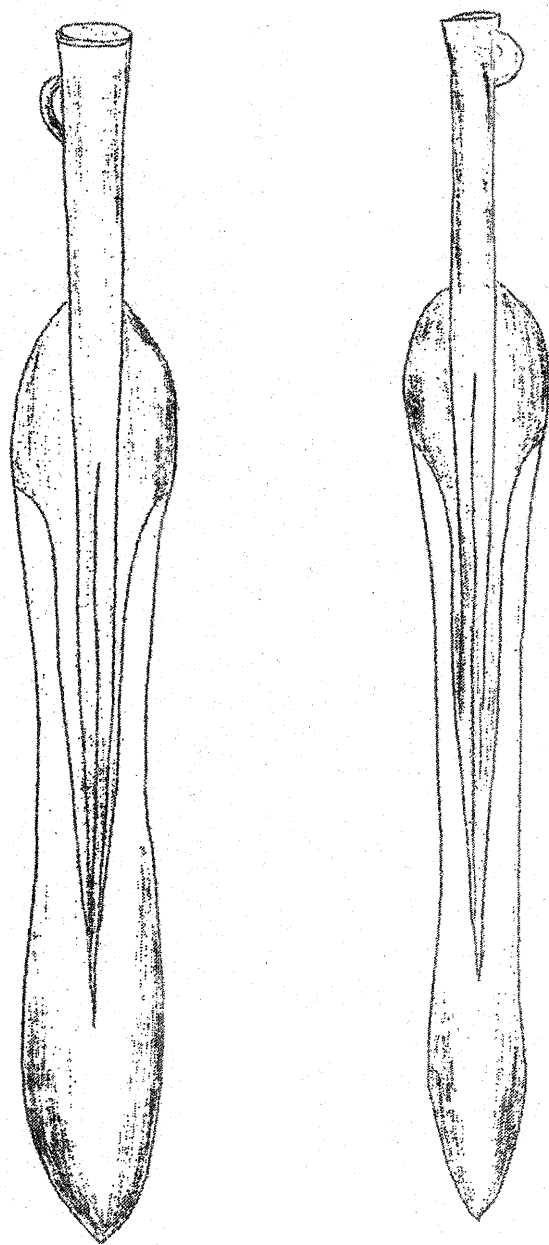
長谷出土



現
寸



女山産女谷出土の銅鉾



二十六日 午後鈴木教授が来られた。人骨多数発掘して居たので非常に喜ばれた。

夕方仕事が終わってから久留米にポンドを買いに行く。

二十七日 朝日、毎日、西日本、夕刊フクニチの各新聞社及び其他一般の人々、町公民館、NHKテレビ等に二十号古墳を、蓋石をはづれたまゝにて公開し鈴木教授の説明あり。
其の内容

- 一 六―七世紀古墳末期のものである
- 一 此の横穴石室古墳は当時の庶民古墳で、人骨も庶民のものである。
- 一 朱を使つてある古墳がある。
- 一 十六号古墳は男女とも一人、計三人
- 一 此人骨から見て身長一米六〇位である。
- 一 二十号古墳は男女三十才位と七才位の子供の人骨である。
- 一 頭蓋骨から見て、丸顔で平たく、鼻が低く、頬骨がつき出て、寸のつまった横ばった顔である。
- 一 人間の骨は生活環境によつて、どうにでも変つてゐるが、頭部と顔の部分は遺伝してゐる。
- 一 貴族と庶民との体格の差はない。
- 一 庶民層の民族の異動は古代より現代迄あつていないと思う。
- 一 二十号の玄室の奥の方に骨粉の骨があつた。
- 一 前に死んだ人の骨をかたづけ、又新に死んだ人を入れていた。
- 一 二十号、十六号の男性の骨は屈強な男であつた。

一、当時の人骨（人達の体格）は、貴族と庶民の違いはない。

一、貴族の移動はあつても、庶民の移動はないと思う。

以上が話の要矣であります。

夜船小屋王振館にて、瀬高町大字山門藤ノ尾遺蹟より出土のロウ石の符又は契（通文証）を鈴木、近藤教授に見てもらふ。曰く、「自分は専門ではないが、金印とならば邪馬台国のきめとなる重大な物かも知れないから大切にするように」。帰京後文化財委員長、斎藤忠博士に九州にまられた時よりれる様に云つておくと言面を取られた。

夜、NHKテレビニュースで女山古墳発掘の放送あり。

二十八日 二十九日

後かたづけ、整理、調査、実測、等を行う。又発掘する者もあつたが、たいした事はなかつた。

（人骨及出土品は東大人類学教室に保存してあります）

二十九日 鈴木教授帰京荷造り発送す。

三十日 近藤教授帰京

後記

東大の鈴木先生及近藤先生より後には詳細な報告が出されると思ひますが未だ女山山内古墳群の調査報告書が発表されないで、始めより終りまで此の調査に従事した浅学な私が、記憶の薄れない肉にまゝとめてみました。

此の古墳群の調査での私の所感を上げてみますと、

1. 土構古墳、赤土を卵形に掘って入口を付けない小型なもの 1号、2号、3号
2. 羨道と玄室が段のあるもの 12号、13号
3. 朱を使った古墳、3号、12号、13号、14号、16号
4. 立穴古墳も完全なる立穴ではなく羨道らしきものがある 14号、16号
5. 4号（未掘）、7号、8号古墳は石積で、石棺と立穴の中間形式で門柱の様な一米四〇程度の石が立ててあった。
6. 此の頃古墳時代の末期の聚落（住居跡群）とのつながりは、各現在の吸門の有る谷々に旧道路が最短（巨離）に作られた形成があるという事
7. 調査後撤出された土中より副葬品が色々ひろい出されている事
8. 此の古墳群の南の台地に之と同じ様に古墳群がある事
9. 此の古墳群が神龍石の列石の内部にある事

付記

私の気付いた点を記録しておきます。なお経費の都合上写真の掲載が出来なかった事をお詫が致します。

- 一、昭和三十四年九月十日 柳川市越山ホールで発表会
- 一、同年九月二十日、上庄八坂神社社務所にて発表会
- 一、昭和三十六年八月 久留米大学付属中学校の生徒（相浦 外一名）に資料を提供す
- 一、同年十一月二十七日 福岡高校教諭 岩崎 光氏 資料の写真を撮って帰る

発行

邪馬台郷土史会